茨城県教育財団文化財調査報告第186集

樋の沢久保遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内
埋　蔵　文　化　財　調　査　報　告　書

平成14年3月

国土交通省　常総国道工事事務所
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第186集

樋の沢久保遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内
埋　蔵　文　化　財　調　査　報　告　書

平成14年3月

国土交通省　常総国道工事事務所
財団法人　茨城県教育財団

序

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は，都心からおよそ半径40～60kmの位置に計画されている総延長約300kmの自動車専用道路で，横浜，厚木，八王子，川越，成田及び木更津などの中核都市を相互に結ぶことにより，首都圏に地域の核となる都市群を形成します。

また，県内において圏央道の通過する県南，県西地域は，国際研究学園都市「つくば」を中心に，首都機能の一翼を担う地域として現在多くのプロジェクトが進められており，圏央道の建設がこれらの地域の発展に大きく貢献することが期待されています。その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である樋の沢久保遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は，国土交通省常総国道工事事務所と埋蔵文化財発掘調査についての委託契約を結び，平成12年４月から５月まで樋の沢久保遺跡の調査を実施いたしました。この調査によって貴重な遺構，遺物が確認され，郷土の歴史を解明する上で多大な成果をあげることができました。

本書は，樋の沢久保遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより，郷土への理解を深めると共に，教育，文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理作業を進めるにあたり，委託者である国土交通省常総国道工事事務所から賜りました多大なる御協力に対し，深く感謝申し上げます。

また，茎崎町教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成14年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，国土交通省常総国道工事事務所の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成12年度に発掘調査を実施した茨城県稲敷郡茎崎町大字樋の沢に所在する樋の沢久保遺跡の発掘調査報告書である。

2　当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調　査　平成12年４月１日～平成12年５月31日

整　理　平成13年４月１日～平成13年５月31日

3　当遺跡の発掘調査は，調査第一課長阿久津久の指揮のもと，調査第１班長海老澤稔，主任調査員小澤重雄，大関武が担当した。

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理第一課長川井正一の指揮のもと，主任調査員茂木悦男が担当した。

5　発掘調査及び整理に際し，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，Ｘ軸＝＋2,200ｍ，Ｙ軸＝＋27,404ｍの交点を基準点（Ａ１a1）とした。

調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を40ｍ四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，４ｍ四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ･･･，西から東へ１，２，３･･･とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へa，b，c･･･j，西から東へ1，2，3･･･0とし，名称は大調査区の名称を冠し，「Ａ１a1区」，「Ｂ２b2区」のように呼称した。

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　井戸－ＳＥ

遺物　　土器－Ｐ　土製品－ＤＰ　石器・石製品－Ｑ　金属製品－Ｍ　拓本記録土器－ＴＰ

土層　　撹乱－Ｋ

3　遺構・遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

●　土　器　　□　石器・石製品　　△　金属製品

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の掲載方法については，次のとおりである。

(1)　遺構全体図は300分の1，各遺構の実測図は60分の１の縮尺で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は，原則として３分の１の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

6　「主軸方向」は，長軸（長径）方向とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例　Ｎ－10°－Ｅ）

7　土器の計測値は，口径－Ａ　器高－Ｂ　底径または高台（脚）径－Ｃとし，単位はcmである。なお，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

8　遺物観察表の備考欄は，土器の現存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

9　遺物番号については，土器，拓本のみ掲載の土器片，土製品，石製品，金属製品ごとに通し番号とし，挿図，観察表，写真図版に記した番号は同一とした。

10　遺構一覧表における計測値は，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

抄　　録

ふりがな	ひのさわくぼいせき
書名	樋の沢久保遺跡
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書2
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第186集
著者名	茂木悦男
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL　029－225－6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL　029－225－6587
発行日	2002（平成14）年3月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
樋の沢久保遺跡	茨城県稲敷郡茎崎町大字樋の沢字久保119番地ほか	08445 ｜ 49	36度 1分 3秒	140度 8分 27秒	19 ～ 21m	20000401 ～ 20000531	1,060㎡	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
樋の沢久保遺跡	屋敷跡	中・近世	井戸跡　1基 溝　1条	土師質土器，陶器（碗・皿），磁器（碗・皿・猪口），泥面子，瓦，石製品（石臼），古銭（寛永通寶・文久永寶）	近世を中心とする屋敷跡と考えられる。溝跡，井戸跡などから九州や瀬戸・美濃系の中・近世の陶磁器が多量に出土している。
	その他	旧石器		剥片	
		縄文		縄文土器（深鉢），石器（石鏃）	
		古墳		土師器（坏,甕）	
		不明	土坑　20基 井戸跡　1基	石製品（砥石），鉄製品（釘・鎌・刀子），銅製品（煙管），鉛製品（鉄砲玉），鉄滓	

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　遺跡の概要 …… 7
　第２節　基本層序 …… 7
　第３節　遺構と遺物 …… 9
　　1　中・近世の遺構と遺物 …… 9
　　(1)　井戸跡 …… 9
　　(2)　溝 …… 12
　　2　時期不明の遺構と遺物 …… 21
　　(1)　井戸跡 …… 21
　　(2)　土坑 …… 21
　　3　遺構外出土遺物 …… 26
　第４節　まとめ …… 28
土坑一覧表
写真図版

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

国土交通省は，茨城県稲敷郡茎崎町樋の沢地区において，一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の建設を進めている。

平成10年1月7日，建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに，一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会があった。

平成10年4月20日，茨城県教育委員会は茎崎町樋の沢地区の現地踏査を実施した。その後，平成11年2月1日，3月1・2日，平成12年2月2～4日に試掘調査を実施した。平成12年2月10日，茨城県教育委員会教育長から建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長あてに，一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内に樋の沢久保遺跡が所在する旨回答した。

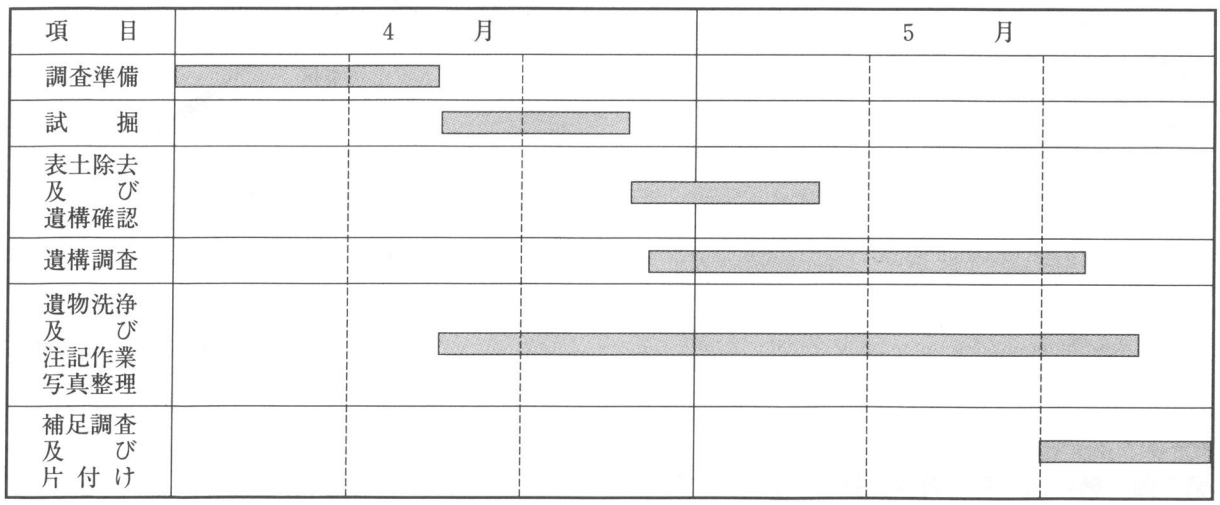
平成12年3月13日，建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに，一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内における埋蔵文化財（樋の沢久保遺跡）の取り扱いについて協議書が提出された。

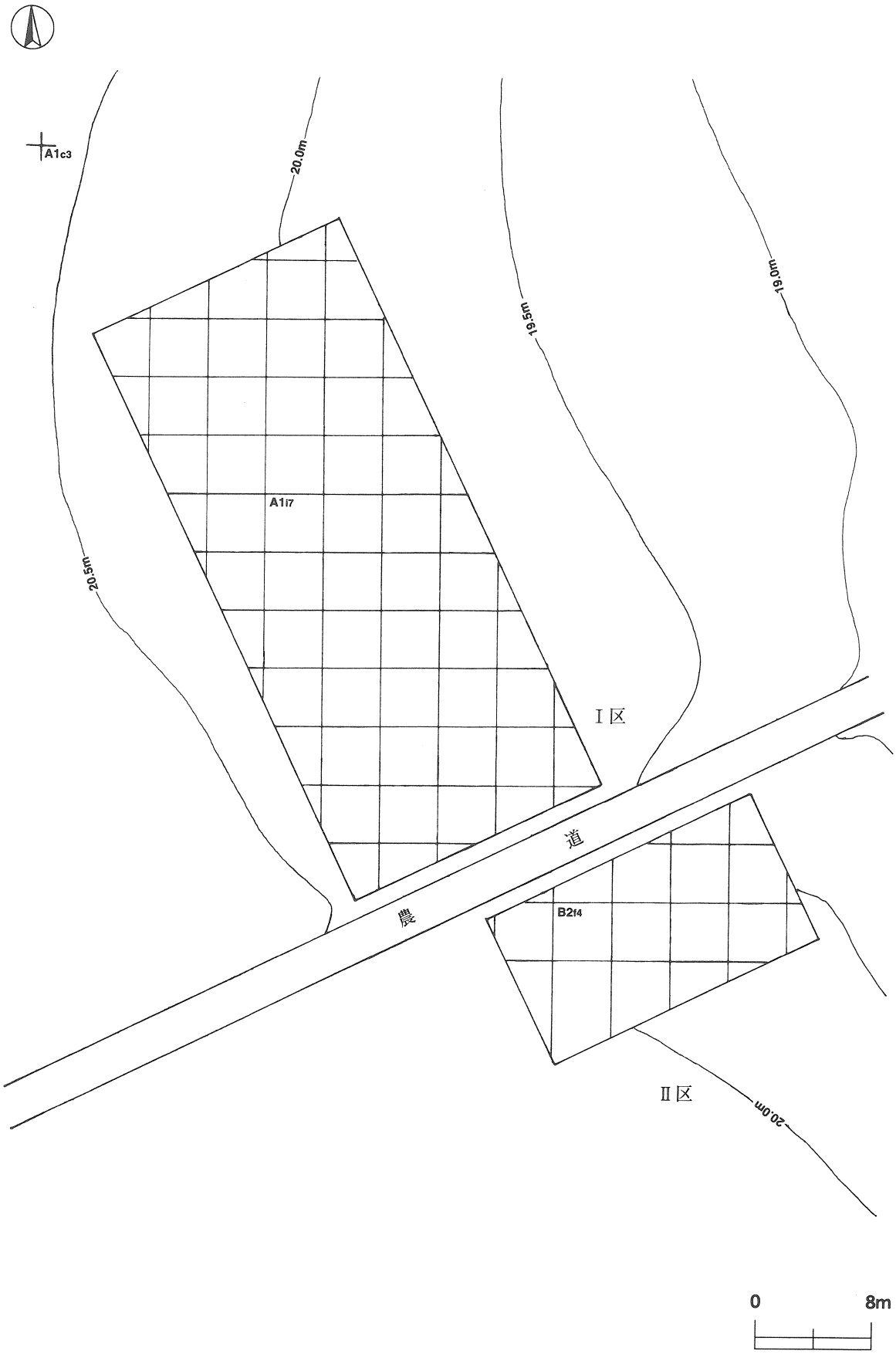
平成12年3月21日，茨城県教育委員会教育長から建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長あてに，樋の沢久保遺跡について，記録保存のための発掘調査を実施するよう回答した。調査機関として，財団法人茨城県教育財団を紹介した。

建設省関東地方建設局常総国道工事事務所と茨城県教育財団は，埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を結び，平成12年4月1日から5月31日にかけて，樋の沢久保遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調　査　経　過

樋の沢久保遺跡の調査は，平成12年4月1日から平成12年5月31日までの2か月間実施した。以下，調査の経過について，その概要を表で記載する。





第１図　樋の沢久保遺跡調査区設定図

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

樋の沢久保遺跡は，茨城県稲敷郡茎崎町大字樋の沢字久保119番地ほかに所在し，東は牛久市，北はつくば市に隣接している。

地勢は，標高23m前後の筑波稲敷台地と呼ばれる平坦な台地となっている。この台地は西を小貝川，東を桜川と南流する河川によって区切られ，その流域には沖積地が発達し，両河川の間には東から花室川，小野川，茎崎町の中央部を流れ牛久沼に注ぐ稲荷川，東谷田川などの中小河川がほぼ北から南に向かって流れている。筑波稲敷台地は，茨城県南部から千葉県北部に広がる常総台地の一部であり，地質的には新生代第四紀更新世に形成された層が基盤となっている。地層は下層から竜ヶ崎砂礫層，常総粘土層，関東ローム層が順次堆積している。茎崎町の台地は，ほぼ並行する稲荷川，東谷田川，西谷田川などによって形成され，小茎や上岩崎にある二つの細長い半島状の台地が東西に広い台地の間を北から南へ牛久沼に向かって延びている。

当遺跡は，小野川右岸の標高20～21mの台地の縁辺部に位置している。
台地は，2～3mの比高をもって小野川の流れる沖積地に臨んでいる。台地上はほぼ平坦であり，遺跡はこの台地の東側に立地している。遺跡周辺の土地利用状況は，主として宅地・畑地・平地林であり，小野川流域の沖積地は主に水田として利用されている。遺跡の現況は，畑地であった。

第2節　歴史的環境

樋の沢久保遺跡が所在する地域は，小野川，稲荷川水系によって開析された台地上に位置し，数多くの遺跡が存在している（第2図）。ここでは，小野川，稲荷川流域の遺跡を述べることにする。

旧石器時代の遺跡は，茎崎町の大井五十塚古墳群内遺跡〈39〉，下岩崎泊崎城跡，小山台貝塚，牛久市のヤツノ上遺跡〈4〉，中久喜遺跡〈5〉がある。ヤツノ上遺跡[1]，中久喜遺跡[2]からは，ナイフ形石器・剥片が出土している。

縄文時代の遺跡は，大小河川の流域及び牛久沼沿岸の台地上に20か所以上確認されており，貝塚も9か所が周知されている。茎崎町の小茎貝塚〈10〉，天宝喜C遺跡〈12〉は中期の大遺跡である。縄文時代の遺跡は，早期には数が少なくかつ小規模で，中期には数が増加し，後期には安定して貝塚が形成され，晩期には数が減少する傾向にある。

古墳時代の遺跡は，稲荷川，小野川沿い及びその周辺に多くの古墳群が確認されている。発掘調査された古墳群は，前述した大井五十塚古墳群[3]があり，前方後円墳2基，円墳9基以上から形成されており，第5・8・10号墳について調査が実施されている。時期は，6世紀後半頃と推定される。集落跡は，この周辺では18遺跡ほど確認されている。調査が行われているものは少なく，不明な点が多いが，ヤツノ上遺跡，中久喜遺跡，中下根遺跡[4]〈38〉，隼人山遺跡[5]〈37〉は中期後半，馬場遺跡[6]〈16〉は中期から後期にかけての集落跡である。

大和政権による全国統一，大化の改新，そして大宝律令の発布によって全国の地方制度は国・郡・里制に改められた。茎崎町は，郡成立以前は筑波の国の一部であったが，その後町の中央部を流れる稲荷川と茎崎町と牛久市の境界を流れる小野川周辺は常陸国河内郡河内郷に編入された[7]。律令期の遺跡は，調査されたものが少

第２図　樋の沢久保遺跡周辺遺跡分布図（谷田部・土浦・藤代・牛久）

表１　樋の沢久保遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
1	樋の沢久保遺跡	○	○		○		○	○	25	駒形遺跡				○			
2	稲岡遺跡						○	○	26	梶内遺跡				○			
3	下大井遺跡	○	○		○	○	○	○	27	下横場遺跡				○			
4	ヤツノ上遺跡		○		○	○			28	新牧田遺跡				○			
5	中久喜遺跡		○		○	○			29	北中島遺跡				○			
6	中山鹿島遺跡		○						30	大久保遺跡				○			
7	菅間遺跡		○						31	行人田遺跡				○	○		○
8	孝学院遺跡		○						32	根柄遺跡				○			
9	小茎北遺跡		○						33	中宿遺跡				○			
10	小茎貝塚		○						34	宮の台遺跡				○			
11	小茎南遺跡		○						35	梨の木遺跡				○			
12	天宝喜Ｃ遺跡		○						36	水落下遺跡				○			
13	天宝喜貝塚		○						37	隼人山遺跡				○	○		
14	天宝喜西遺跡		○		○				38	中下根遺跡				○	○		
15	大井遺跡		○						39	五十塚古墳群				○			
16	馬場遺跡		○		○	○			40	八木遺跡				○			
17	東山遺跡		○		○	○			41	高山遺跡				○			
18	坂本遺跡		○	○					42	稲荷山古墳群				○			
19	守小橋遺跡		○						43	下大井古墳群				○			
20	権現山上池遺跡		○		○				44	道山古墳群				○			
21	出し山遺跡		○		○				45	内記古墳群				○			
22	後門遺跡		○		○				46	高崎城跡						○	
23	塚下遺跡		○		○				47	田宮一里塚							○
24	沖新田道祖神前遺跡		○		○				48	荒川沖一里塚							○

ないが，平成11年度に調査された下大井遺跡[8]からは，この時代の竪穴住居跡が16軒確認されている。

中世の遺跡は，茎崎町内の稲荷川沿いに戦国時代勢力を拡大していった岡見氏の支城であった高崎城跡〈46〉，応永３年（1396年）小田治朝の子岡野宮内少輔康朝が築城したと言われる下岩崎泊崎城跡[9]，御城跡，九万坪館跡，館山館跡，牛久市の岡見城跡等がある。下岩崎泊崎城跡は，内濠・外濠・土塁に囲まれた連郭式の平山城で，昭和54年の調査により本丸跡・濠・土塁などが確認されている。前述した下大井遺跡からは，中世の塚壙墓と土壙墓が１基ずつ検出され，陶器・土師質土器・古銭等が出土している。

近世の遺跡は，稲荷川と小野川の間に位置する牛久市の田宮（たぐう）一里塚〈47〉，小野川左岸の荒川沖（あらかわおき）一里塚〈48〉が知られているのみである。

※文中の〈　〉内の番号は，表１，第２図の該当番号と同じである。

註

1）　茨城県教育財団「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）　ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第81集　1993年３月

2）　茨城県教育財団「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）　中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集　1993年３月

3）　茎崎町史編さん委員会『茎崎町史』　1990年３月

4）　茨城県教育財団「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　中下根遺跡　西ノ原遺跡　隼人山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第113集　1996年６月

5）　註４）に同じ

6）　茨城県教育財団「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）　馬場遺跡　行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集　1996年３月

7）　註３）に同じ

8）　茨城県教育財団「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書１　下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集　2001年３月

9）　茎崎町教育委員会『泊崎城跡』　1980年８月

第3章　調 査 の 成 果

第1節　遺 跡 の 概 要

樋の沢久保遺跡は，調査区域が農道を挟んで南北２か所に分かれているため便宜上，北側をⅠ区，南側をⅡ区とした。

今回の調査によって，中世から近世にかけての遺跡であることが判明した。遺構としては，近世の井戸跡１基，溝一条，時期不明の井戸跡１基，土坑20基が検出された。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）で７箱分が出土した。遺物は，中世から近世にかけての土師質土器，陶磁器が中心で，陶磁器は瀬戸・美濃系や肥前系のものが多い。他には，土師器，須恵器，石製品（砥石），鉄製品（釘，鎌，刀子），古銭などが出土している。

第2節　基 本 層 序

調査Ⅰ区南部のＡ１f5区にテストピットを設定し，約２ｍ掘り下げて，土層の堆積状況の観察を行った（第３図）。

１層は，暗褐色の表土層で，ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含んでいる。粘性は弱く，締まりもない。層厚は15～23cmである。

２層は，褐色の表土層で，ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含んでいる。粘性・締まりとも普通である。層厚は４～15cmである。

３層は，にぶい黄褐色のソフトローム層で，白色粒子を少量含んでいる。撹乱を受けており，水平堆積には見えない。層厚は10～40cmである。

４層は，にぶい黄橙色の粘土層で，鉄分を中量含んでいる。粘性・締まりとも強い。層厚は，10～38cmである。

５層は，にぶい黄褐色のソフトローム層で，赤色粒子を含んでいる。粘性・締まりとも強い。層厚は18cm～40cmである。

６層は，褐色のハードローム層で，緻密で，硬く光沢がある。粘性・締まりとも強い。層厚は10～22cmである。

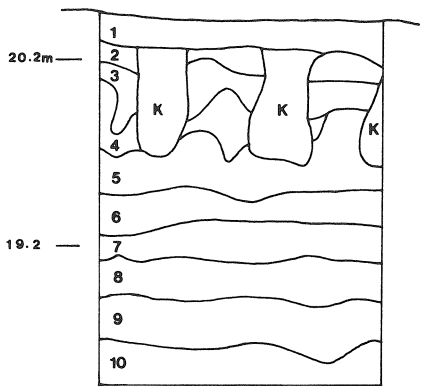
７層は，黄褐色のハードローム層で，粘性・締まりとも強い。層厚は10～20cmである。

８層は，明褐色のハードローム層で，赤色粒子を少量含んでいる。粘性・締まりとも強い。層厚は18～28cmである。

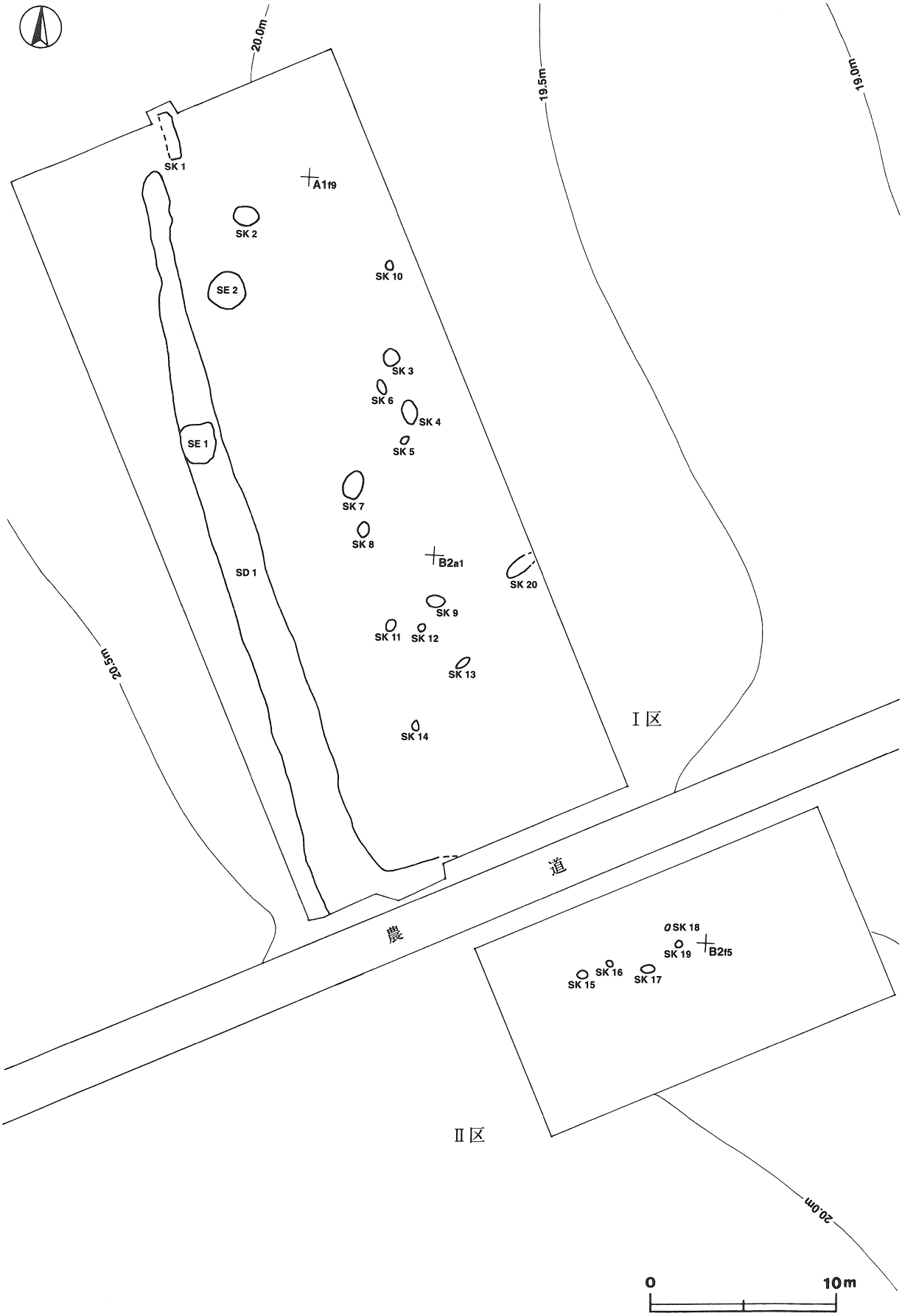
９層は，黄褐色のハードローム層で，赤色粒子を少量含んでいる。粘性・締まりとも強い。層厚は20～30cmである。

10層は，黄橙色の粘土層で，赤色粒子を少量，鉄分を微量含んでいる。粘性・締まりとも強い。層厚は12～24cmである。

遺構は，第２層上面で確認され，第２層から第５層にかけて掘り込まれている。



第３図　基本土層図



第4図　樋の沢久保遺跡遺構全体図

第3節　遺構と遺物

1　中・近世の遺構と遺物

遺構調査の結果，遺跡北部の調査Ⅰ区から，井戸跡1基と溝1条が検出された。そして，これらの遺構から中・近世と思われる在地産の土師質土器の他に瀬戸美濃系及び肥前系と思われる陶磁器が多数出土した。

(1)　井戸跡

第1号井戸跡（第5図）

位置　調査Ⅰ区の北西部，A 1i7区。

重複関係　土層の堆積状況から，第1号溝が構築される以前に構築された可能性が高い。

規模と形状　長軸2.88m，短軸2.45mの長方形を呈する素掘りの井戸跡である。断面の形状は，上方が漏斗状を下方が円筒状を呈する。確認面から1mの深さまでは掘り下げたが，湧水のため底面までは調査することはできなかった。長径方向は，N－11°－Wである。

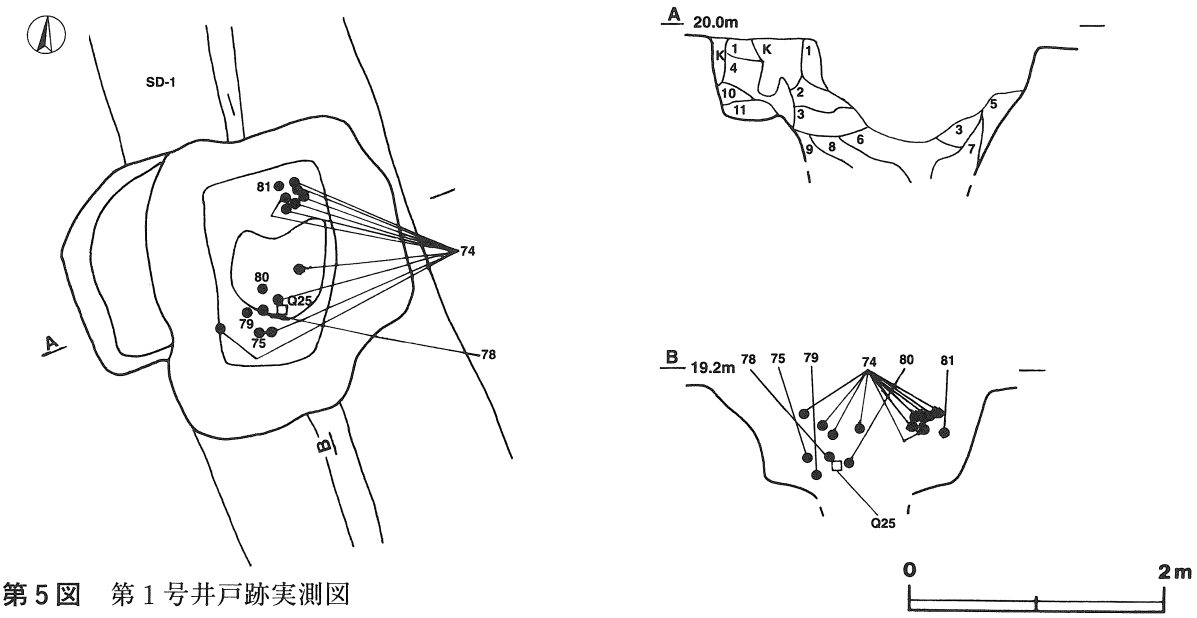
覆土　11層からなる。ブロック状に堆積しており，廃棄のために埋め戻したと考えられる。

土層解説

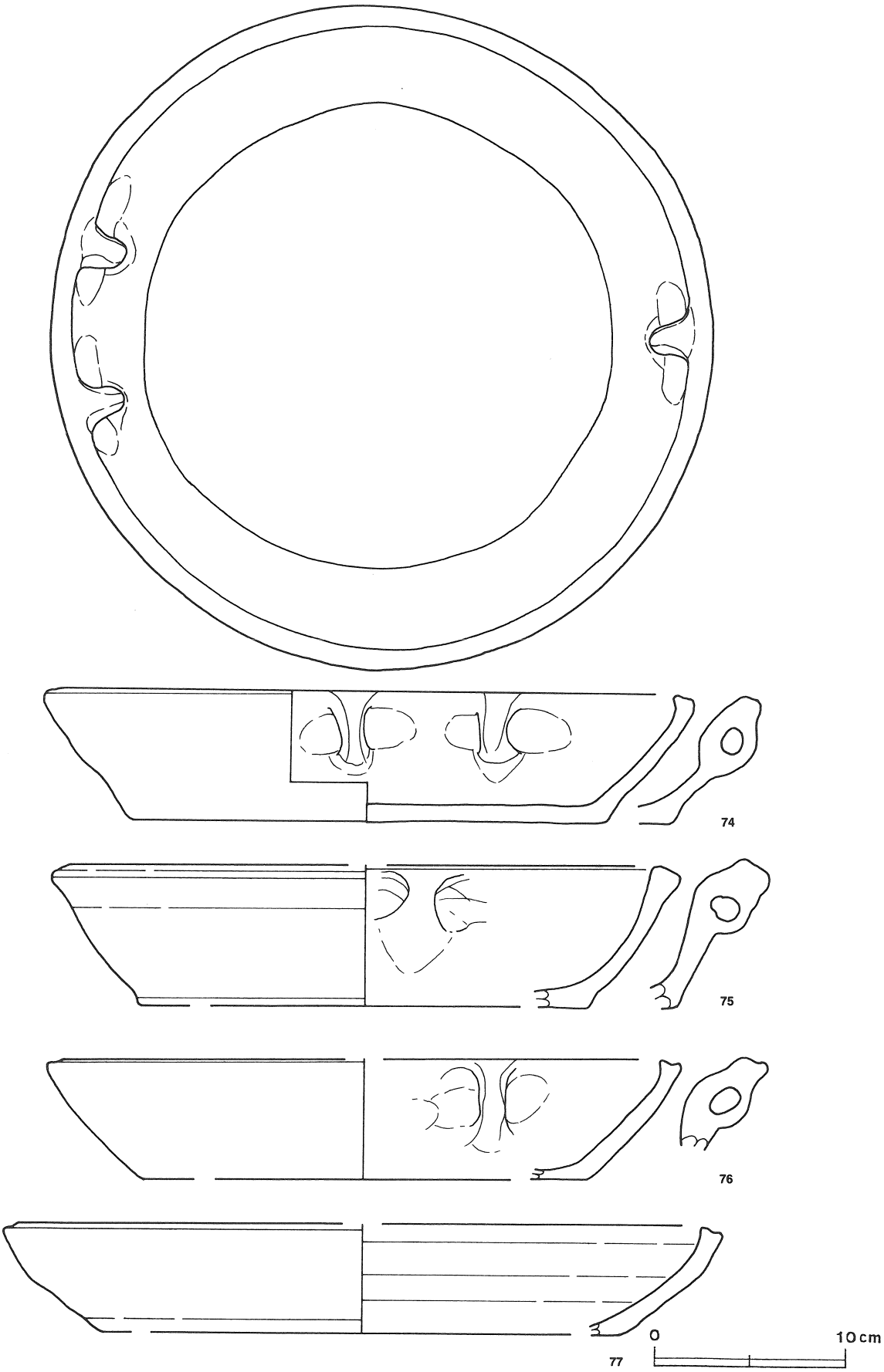
1	黒褐色	ローム粒子少量，赤色粒子微量
2	褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
3	暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子中量
4	褐色	ローム大ブロック・ローム小ブロック中量
5	黒褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6	暗褐色	ローム粒子中量
7	極暗褐色	ローム粒子微量
8	褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック微量
9	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
10	褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量
11	褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

遺物出土状況　土師質土器15点，石製品（砥石）1点が出土している。第6図74の土師質土器の焙烙は中央部と北部の覆土上層から出土したものが接合した。第7図78の焙烙，79の鉢，80の片口の擂鉢，Q25の砥石は中央部の覆土上層から，81の擂鉢は北部の覆土上層から出土した。76・77の焙烙は覆土中から出土している。

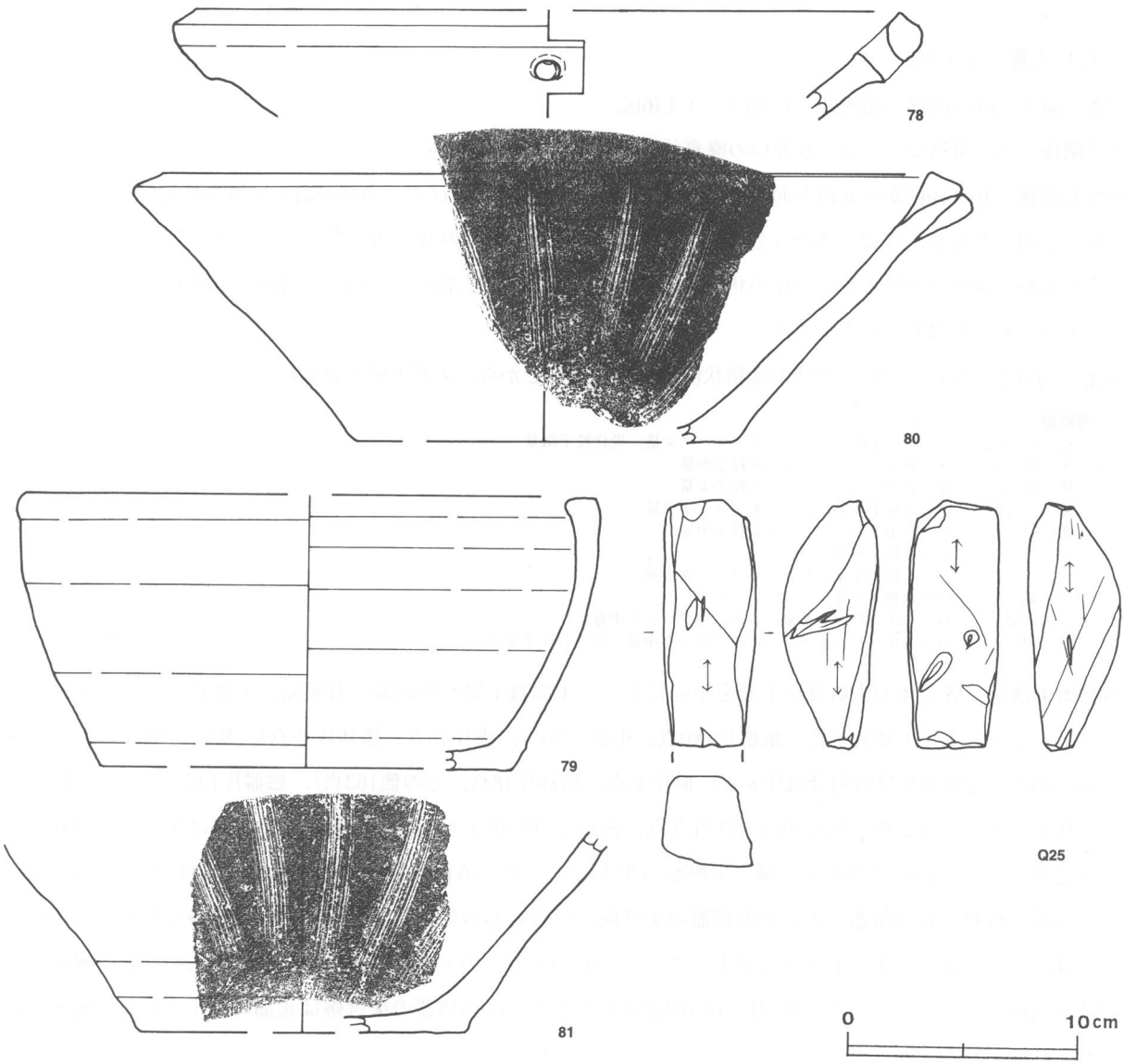
所見　本跡は覆土の堆積状況や遺物の出土状況から，埋め戻され，廃棄された可能性が高いと考えられる。時期は，出土遺物から近世（18～19世紀）と思われる。



第5図　第1号井戸跡実測図



第6図　第1号井戸跡出土遺物実測図(1)



第7図　第1号井戸跡出土遺物実測図(2)

第1号井戸跡出土遺物観察表（第6・7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
74	土師質	焙烙	33.6	6.6	24.6	長石・石英・雲母	褐	普通	3内耳残存。体部内・外面ナデ。	中央部及び北部の覆土上層	95%　PL 5
75	土師質	焙烙	[32.4]	7.3	[23.2]	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	1内耳残存。	中央部覆土上層	20%　PL 5
76	土師質	焙烙	[32.8]	6.2	[23.0]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	1内耳残存。体部内・外面ナデ。	覆土中	20%　PL 5
77	土師質	焙烙	[37.2]	5.6	[26.8]	長石・石英・雲母	赤褐	普通	体部内・外面ナデ。	覆土中	15%　PL 5
78	土師質	焙烙	[32.2]	(4.6)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部内・外面ナデ。1か所穿孔。	中央部覆土上層	20%　PL 5
79	土師質	鉢	[25.2]	11.7	[17.8]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内・外面ナデ。口唇部は肥厚する。	中央部覆土上層	30%　PL 5
80	土師質	擂鉢	[35.6]	11.6	[16.2]	長石・石英・雲母	暗赤褐	普通	5条1単位の擂り目。片口。	中央部覆土上層	20%　PL 5
81	土師質	擂鉢	－	(8.6)	[14.4]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	7条1単位の擂り目。	北部覆土上層	20%　PL 5

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q25	砥石	(10.6)	3.9	4.1	(179.8)	凝灰岩	4面使用　表面に使用痕	中央部覆土上層	PL 6

(2) 溝

第1号溝（第9図）

位置　調査Ⅰ区の南部～北西部，Ｂ２e1～Ａ１f6区。

重複関係　出土遺物から，第１号井戸の廃棄後，構築されたと思われる。

規模と形状　Ｂ１e0区から北西方向（Ｎ－16°－Ｗ）に，直線的に延びる。南部が調査区域外に延びているため，規模は不明であるが，確認できた長さは40.8mである。また，南部のＢ１e0区から，東方向に曲がっていると考えられるが，調査区域外となり全体の状況は検出できなかった。上幅0.9～3.4m，下幅0.2～0.6m，深さは31～46cmである。断面形はＵ字形を呈する。

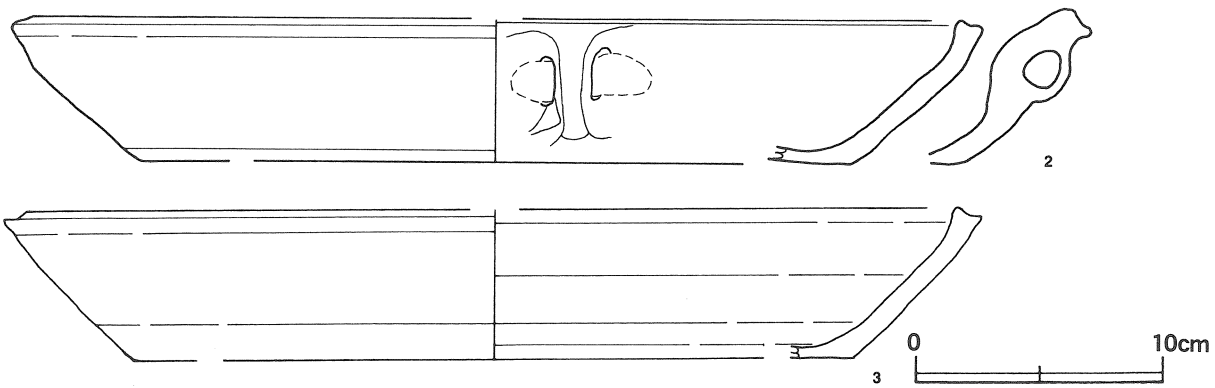
覆土　10層からなる。ブロック状の堆積状況がみられることから，人為堆積と思われる。

土層解説

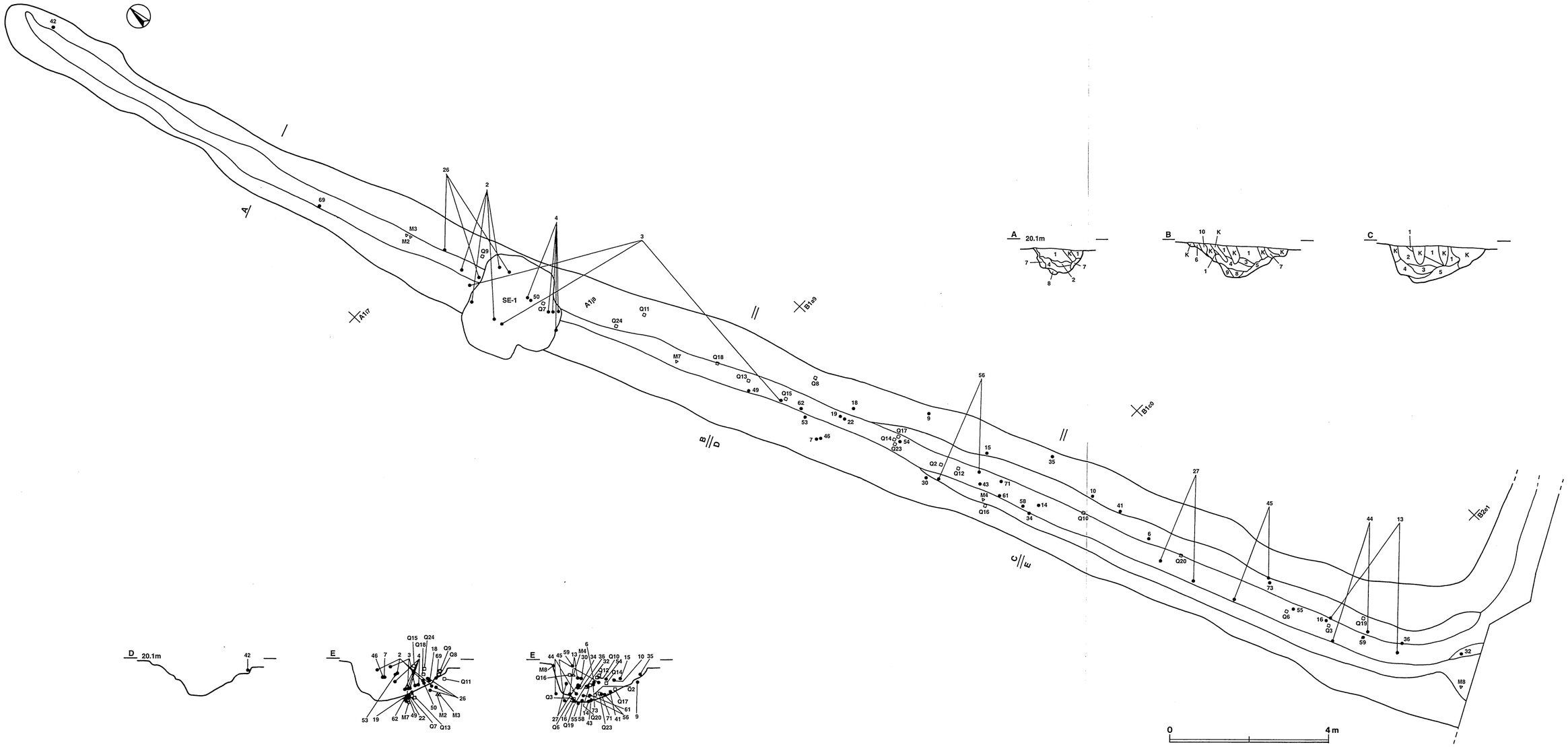
1	暗　褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
2	黒　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
3	黒　褐　色	ローム中ブロック・ローム粒子少量
4	褐　　色	ローム粒子多量，ローム大ブロック少量
5	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
6	褐　　色	ローム粒子多量
7	褐　　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
8	黒　褐　色	ローム粒子中量
9	にぶい褐色	ローム大ブロック多量，ローム中ブロック中量
10	暗　褐　色	ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

遺物出土状況　溝全体の中層及び下層を中心にして，土師質土器や陶磁器，石製品，金属製品，古銭などが多量に出土している。土師質土器（焙烙片180点，小皿片36点，甕片45点，擂鉢片２点），陶器（碗片３点，天目茶碗片40点，灯明皿及び灯明受皿片８点，皿片２点，擂鉢片18点，その他163点），磁器片136点，瓦質土器片39点，瓦片１点，石臼２点，砥石19点，鉄釘３点，古銭２点が出土している。第10図13～16は陶器の灯明皿及び灯明受皿である。15以外は南部の覆土下層から出土している。第11図58の磁器の広東碗，41の陶器の双耳壺，43の陶器の徳利，44の陶器の壺，55の磁器の染付碗，61の磁器の染付碗，第12図56の磁器の染付碗，71の磁器の皿は南部の底面及び覆土下層から出土している。第10図18・19・22の陶器の碗，第11図62の磁器の碗は，中央部の底面から出土している。第11図26の陶器の天目茶碗，69の磁器の染付碗は北部の覆土下層及び底面からそれぞれ出土している。

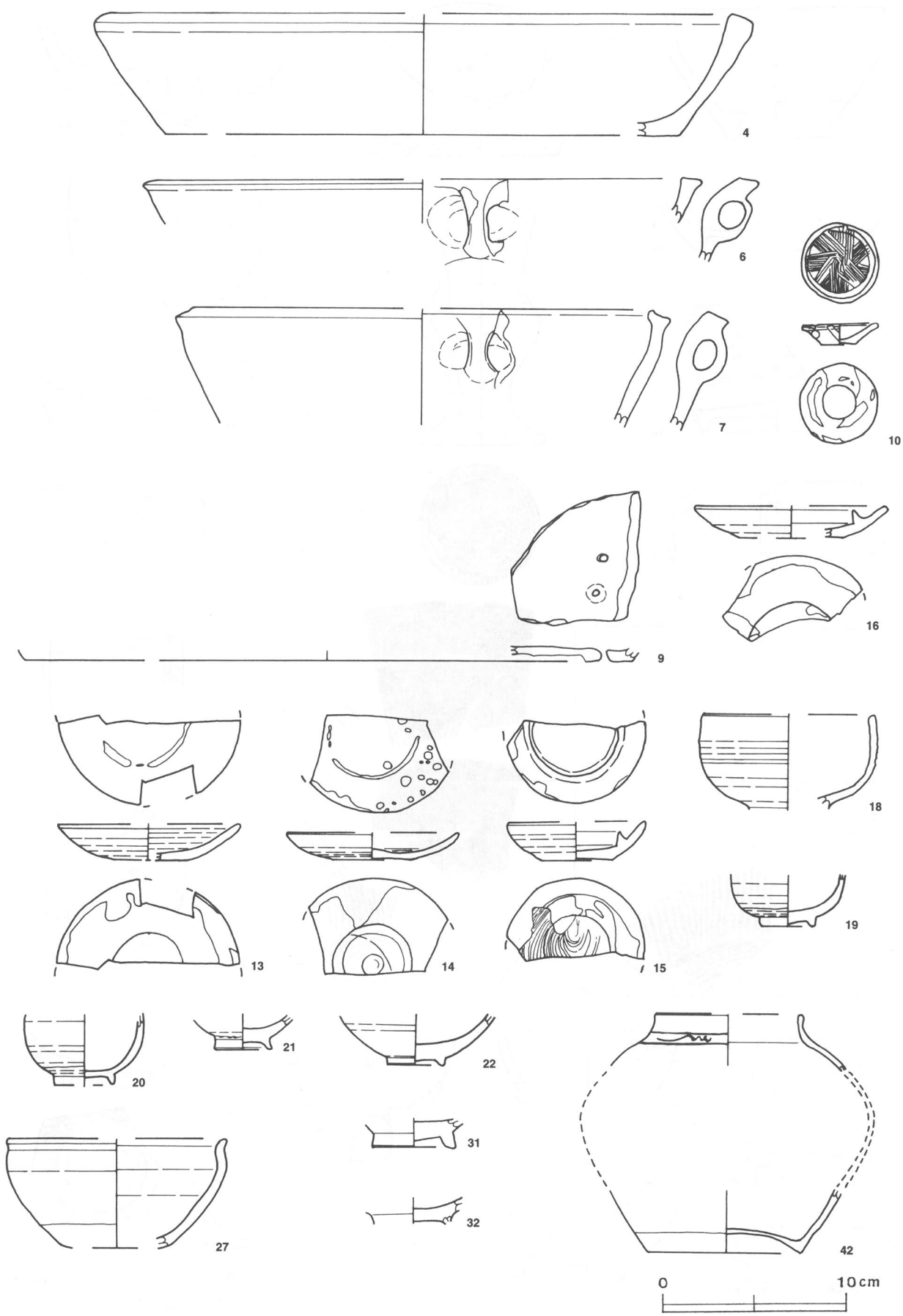
所見　これらの遺物は，長期間にわたって断続的に投棄されたと思われる。近くに近世の屋敷の存在が想定され，この溝はこの屋敷に伴う可能性が高い。時期は，出土遺物から近世（18～19世紀）と思われる。



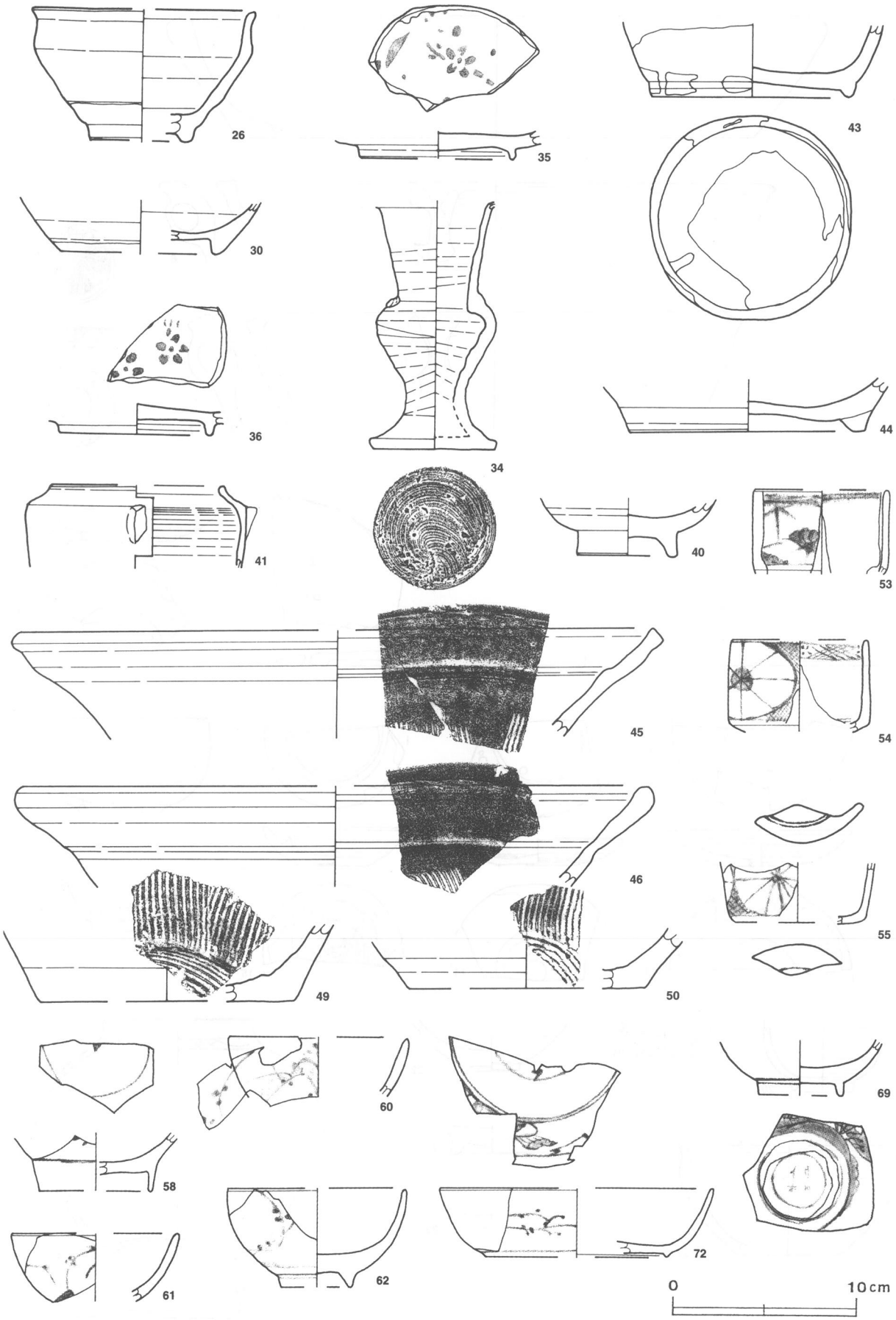
第8図　第１号溝出土遺物実測図(1)



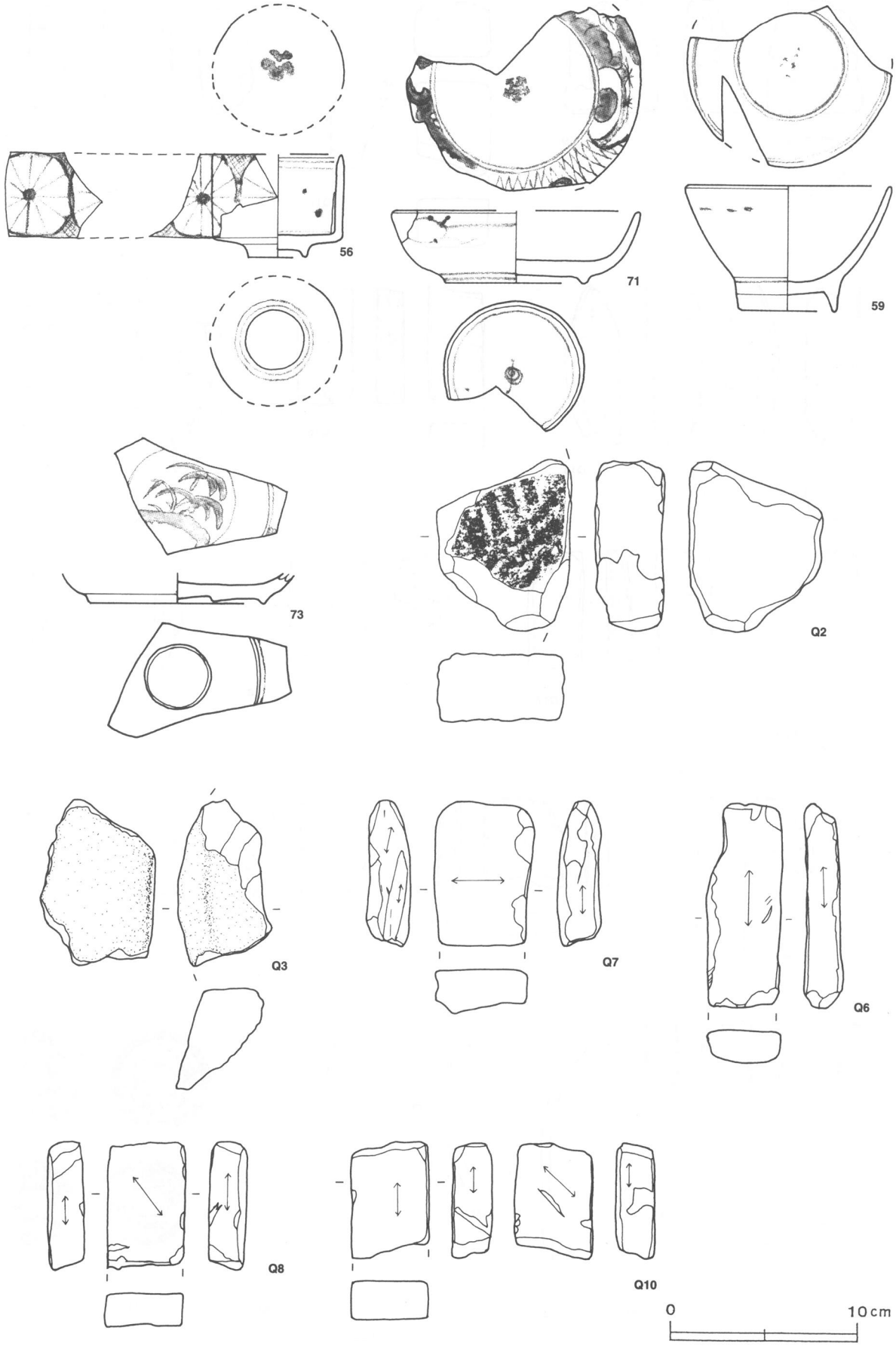
第９図　第１号溝実測図



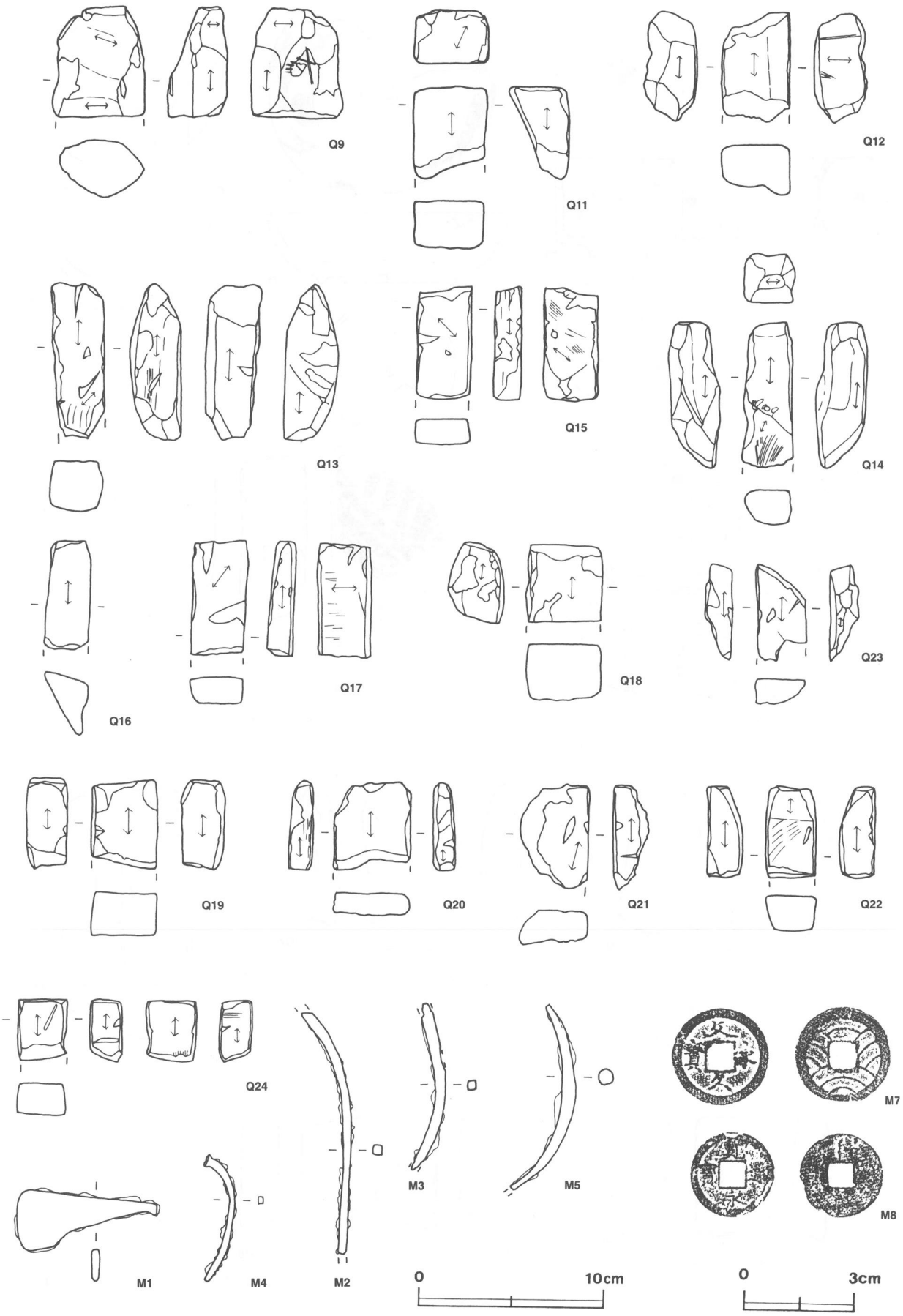
第10図　第１号溝出土遺物実測図(2)



第11図　第１号溝出土遺物実測図(3)



第12図　第１号溝出土遺物実測図(4)



第13図　第１号溝出土遺物実測図(5)

第１号溝出土遺物観察表（第８・10～13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
2	土師質	焙烙	[38.3]	6.3	[28.2]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	１内耳残存。体部内・外面ナデ。	北部覆土上層と下層	体部外面煤付着PL5
3	土師質	焙烙	[39.0]	6.0	[28.8]	長石・石英・雲母	褐	普通	体部内・外面横ナデ。	北部底面	PL 5
4	土師質	焙烙	[35.8]	6.6	[28.0]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部内・外面横ナデ。	北部覆土下層	PL 5
6	土師質	焙烙	[30.4]	(4.5)	－	長石・石英・雲母・砂粒	にぶい赤褐	普通	１内耳残存。体部内・外面ナデ。	南部覆土中層	PL 5
7	土師質	焙烙	[27.0]	(6.4)	－	長石・石英・雲母・砂粒	にぶい褐	普通	１内耳残存。体部内・外面ナデ。	中央部覆土中層	PL 5
9	土師質	焙烙	－	(0.8)	[33.0]	長石	にぶい黄橙	普通	底部片。２か所穿孔。	中央部底面	PL 5
10	土師質	ミニチュア土器	4.2	1.2	0.8	長石・赤色粒子	橙	普通	10条１単位の擂り目。	南部覆土中層	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉薬	産地	年代	出土位置	備考
13	陶器	灯明皿	[10.9]	1.9	[3.8]	灰黄	赤褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	19C	南部覆土下層と中層	45% 見込み環状痕PL3
14	陶器	灯明皿	[9.4]	1.5	4.2	灰褐	明赤褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	19C	南部底面	50% 見込み環状痕PL3
15	陶器	灯明受皿	[7.6]	2.1	3.8	にぶい黄橙	にぶい赤褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	19C	中央部中層	50%PL 3
16	陶器	灯明受皿	[10.6]	1.7	[5.6]	灰黄	暗赤褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	19C	南部覆土下層	30% 仕切りに切り込み
18	陶器	碗	[9.4]	(5.1)		灰白	(上)灰白(下)暗褐		鉄・灰釉	瀬戸・美濃系	18C後半	中央部覆土下層	30% 掛分碗PL3
19	陶器	碗	－	(2.8)	2.8	にぶい黄橙	灰白		灰釉	瀬戸・美濃系	18C～19C	中央部底面	50%
20	陶器	碗	－	(3.9)	[3.2]	灰白	灰白		灰釉	瀬戸・美濃系	18C～19C	覆土中	40%
21	陶器	碗	－	(1.4)	3.0	灰白	灰白		灰釉	瀬戸・美濃系	18C～19C	覆土中	30%
22	陶器	碗	－	(2.8)	3.2	灰黄	灰白		灰釉	瀬戸・美濃系	18C～19C	中央部底面	30%
26	陶器	天目茶碗	[12.2]	7.1	[5.4]	にぶい褐	褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	16C中葉～17C前葉	北部底面	50%PL 3
27	陶器	天目茶碗	[12.0]	5.9	[6.0]	灰白	黒		鉄釉	瀬戸・美濃系	16C中葉～17C前葉	南部覆土中層	30%PL 3
30	陶器	壺か	－	(2.9)	[8.6]	にぶい黄橙	黒		鉄釉	瀬戸・美濃系	江戸後期	中央部覆土中層	10%
31	陶器	天目茶碗	－	(1.6)		灰黄	黒		鉄釉	瀬戸・美濃系	16C中葉～17C前葉	覆土中	10%
32	陶器	碗	－	(1.4)	4.6	灰白	暗褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	18C後半	南部覆土中層	10% 掛分碗
34	陶器	仏花瓶	－	(13.4)	6.8	灰白	灰褐		灰釉	瀬戸・美濃系	19C	南部覆土中層	80%PL 3
35	陶器	皿	－	(1.5)	[8.2]	灰白	にぶい黄橙	型紙刷り梅花文	灰釉	瀬戸・美濃系	17C末	南部覆土下層	10%PL 3
36	陶器	皿	－	(1.6)	[8.2]	灰白	灰白	型紙刷り梅花文	灰釉	瀬戸・美濃系	17C末	南部覆土中層	10%PL 3
40	陶器	呉器手碗	－	(3.1)	5.4	灰白	灰白		灰釉	肥前系	17C末	覆土中	10% 細かい貫入
41	陶器	双耳壺	[9.4]	(4.4)	－	灰白	にぶい赤褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	18C	南部覆土下層	５％
42	陶器	土瓶	[8.0]	[16.5]	[8.2]	にぶい橙	(外)灰白(内)にぶい赤褐	白化粧土	鉄絵・灰釉	笠間か	幕末	北部覆土中層	20%PL 3
43	陶器	徳利	－	4	11.0	浅黄橙	(外)灰褐(内)にぶい赤褐		灰釉	瀬戸・美濃系	19C	南部底面	20%PL 3
44	陶器	徳利	－	(3.0)	12.8	浅黄橙	(外)浅黄橙(内)黄褐		灰釉・鉄釉	瀬戸・美濃系	19C	南部床面と覆土下層	20%PL 3
45	陶器	擂鉢	[35.2]	(5.8)	－	灰白	暗赤褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	18C～19C	南部床面と覆土中層	10%
46	陶器	擂鉢	[34.6]	(5.4)	－	浅黄	暗赤褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	18C～19C	中央部覆土中層	５％PL 3
49	陶器	擂鉢	－	(4.1)	[13.8]	灰白	暗赤褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	18C～19C	中央部底面	10%PL 3
50	陶器	擂鉢	－	(3.3)	[12.8]	灰白	極暗赤褐		鉄釉	瀬戸・美濃系	18C～19C	北部覆土下層	５％
53	磁器	碗	[4.4]	(4.5)	－	灰白	灰白	染付雪もち笹文	透明	肥前系		中央部覆土中層	10%PL 4
54	磁器	碗	[7.4]	(5.0)	－	灰白	灰白	染付菊散し	透明	肥前系		中央部覆土中層	20%PL 4
55	磁器	碗	－	(3.3)	[7.4]	灰白	灰白	染付菊散し	透明	肥前系		南部底面	20%
56	磁器	碗	[7.0]	5.4	3.2	灰白	灰白	染付見込に五弁花菊散し	透明	瀬戸・美濃系	19C	南部覆土下層	50%PL 4
58	磁器	広東碗	－	(3.2)	[6.2]	灰白	灰白	染付	透明	肥前系		南部底面	30%PL 4
59	磁器	広東碗	11.0	5.5	5.2	灰白	灰白	染付	透明	肥前系		南部覆土上層	70%PL 4
60	磁器	碗	[9.8]	(3.2)	－	灰白	灰白	染付梅樹文	透明	肥前系		覆土中	10%PL 4
61	磁器	碗	[9.2]	(3.7)	－	灰白	灰白	染付梅樹文	透明	肥前系		南部覆土下層	10%
62	磁器	碗	[9.8]	(5.3)	[3.8]	灰白	灰白	染付梅樹文底裏に文字銘	透明	肥前系		中央部底面	５％ 畳付砂付着PL4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉薬	産地	年代	出土位置	備考
69	磁器	碗	−	(3.0)	[5.6]	灰白	灰白	染付　草花文	透明	肥前系	17C末か	北部底面	30%　PL4
71	磁器	皿	[13.2]	3.3	7.4	灰白	灰白	染付　唐草文　見込み五弁花	透明	肥前系	18C	南部覆土下層	60%　PL4
72	磁器	皿	[15.0]	3.7	[9.8]	灰白	灰白	染付　蛇の目釉剥ぎ	透明	肥前系		覆土中	30%　PL4
73	磁器	皿	−	(1.6)	[9.1]	灰白	灰白	染付　竹文　蛇の目釉剥ぎ	透明	肥前系		南部覆土中層	10%　PL4

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q2	石臼	(9.0)	(7.2)	(3.2)	(346.5)	砂岩	下臼か	中央部覆土下層	PL 6
Q3	石臼	(8.7)	(5.0)	(6.1)	(219.5)	安山岩	上臼か	南部底面	
Q6	砥石	(10.7)	4.0	(2.1)	(129.0)	凝灰岩	2面使用	南部底面	PL 6
Q7	砥石	(7.7)	5.3	(2.4)	(130.5)	凝灰岩	3面使用	北部覆土下層	PL 6
Q8	砥石	(6.8)	4.1	2.0	(89.9)	凝灰岩	3面使用	中央部覆土下層	PL 6
Q9	砥石	(6.0)	5.1	3.1	(94.4)	凝灰岩	3面使用	北部覆土下層	
Q10	砥石	(6.1)	4.1	2.1	(86.4)	凝灰岩	4面使用	南部覆土中層	PL 6
Q11	砥石	(5.0)	4.0	2.6	(71.3)	凝灰岩	3面使用	中央部底面	PL 6
Q12	砥石	(5.9)	3.9	(2.9)	(81.1)	凝灰岩	3面使用	南部覆土中層	
Q13	砥石	(8.5)	3.0	2.9	(88.0)	凝灰岩	4面使用	中央部底面	
Q14	砥石	(7.9)	2.8	2.8	(63.1)	凝灰岩	4面使用	中央部覆土中層	
Q15	砥石	(6.2)	3.0	1.5	(44.2)	凝灰岩	3面使用	中央部覆土上層	
Q16	砥石	(5.9)	2.5	3.3	(61.0)	凝灰岩	1面使用	南部覆土上層	PL 6
Q17	砥石	(6.2)	3.0	1.4	(45.7)	凝灰岩	3面使用　表面に使用痕	中央部覆土下層	PL 6
Q18	砥石	(4.2)	4.1	3.0	(74.7)	凝灰岩	2面使用	中央部覆土中層	
Q19	砥石	(4.9)	3.7	2.3	(67.1)	凝灰岩	3面使用	南部覆土中層	
Q20	砥石	(4.7)	4.2	1.3	34.2	凝灰岩	3面使用	南部覆土中層	
Q21	砥石	(5.7)	(3.8)	(2.0)	(41.4)	凝灰岩	2面使用	覆土中	
Q22	砥石	(4.9)	2.8	2.0	(42.6)	凝灰岩	3面使用	覆土中	PL 6
Q23	砥石	(5.2)	2.9	(1.6)	(18.8)	凝灰岩	3面使用	中央部底面	
Q24	砥石	(3.3)	2.7	1.8	(20.0)	凝灰岩	4面使用	中央部覆土上層	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
M1	不明	(7.4)	3.3	0.4	(31.0)	鉄		覆土中	PL 6
M2	釘	(13.1)	0.5	0.5	(14.3)	鉄	断面四角形	北部底面	PL 6
M3	釘	(9.1)	0.5	0.5	(10.8)	鉄	断面四角形	北部底面	
M4	釘	(7.0)	0.4	0.3	(4.3)	鉄	断面四角形	南部覆土中層	
M5	不明	(10.1)	0.8	0.8	(19.4)	鉄		覆土中	

番号	銭銘	径(cm)	口径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	初鋳年代（西暦）	出土位置	備考
M7	文久永寶	2.7	0.7	0.1	3.0	文久3年（1863年）江戸	中央部底面	PL 6
M8	寛永通寶	2.3	0.7	0.1	2.2	江戸（1700年）	南部覆土上層	PL 6

2　時期不明の遺構と遺物

遺構調査の結果，遺跡内の調査Ⅰ区及びⅡ区から，井戸１基と土坑20基が検出された。これらは，時期を限定できる遺物がなく時期不明とした。また，土坑については，遺存状態が良好なものについては解説し，それ以外は一覧表で記載する。

(1)　井戸跡

第２号井戸跡（第14図）

位置　調査Ⅰ区の北西部，Ａ１g8区。

規模と形状　径1.97～2.08の円形を呈する素掘りの井戸跡である。断面の形状は，上方が漏斗状を呈する。確認面から1.6mの深さまでは掘り下げたが，湧水のため底面までは調査することができなかった。

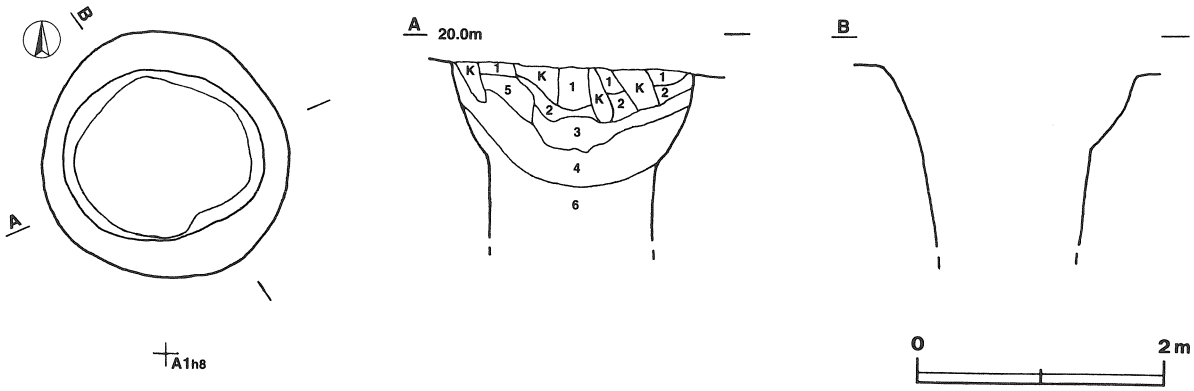
覆土　６層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と思われる。

土層解説

1	黒　　色	ローム粒子・赤色粒子微量
2	極暗褐色	ローム粒子微量
3	暗　褐　色	ローム粒子・赤色粒子少量
4	暗　褐　色	ローム粒子少量，赤色粒子微量
5	褐　　色	ローム粒子多量
6	明　褐　色	ローム粒子多量

遺物出土状況　陶器片１点が覆土中から出土している。

所見　陶器片１点が覆土中から出土しているが，撹乱を受けており，本遺構に伴うものかは判断できない。よって，時期は不明である。



第14図　第２号井戸跡実測図

(2)　土坑

第１号土坑（第15図）

位置　調査Ⅰ区の北部の西端，Ａ１e7区。

規模と形状　北部が調査区域外となっている。長軸2.10m，推定短軸0.67mで長方形と推定される。深さは40cmである。長軸方向は，N－22°－Wである。壁は，外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

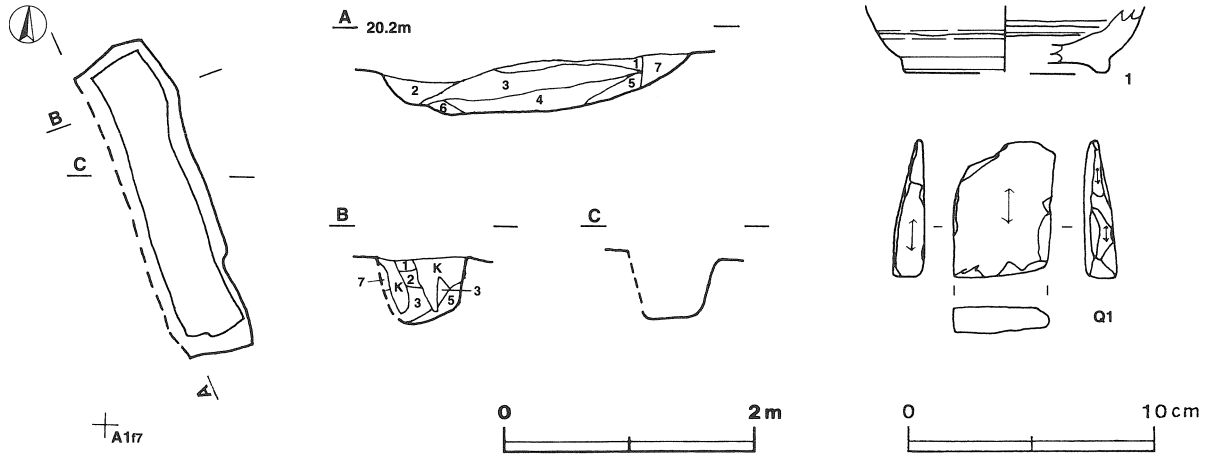
覆土　７層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子中量
2　褐　　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
3　褐　　色　　ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・ローム粒子少量
4　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
5　暗　褐　色　　ローム粒子少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
6　褐　　色　　ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
7　褐　　色　　ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片５点，陶器片４点，磁器片６点，石製品１点が出土している。

所見　遺物は覆土中から出土しており，形状から中世の墓壙の可能性は考えられるが，時期を限定することは難しい。



第15図　第１号土坑・出土遺物実測図

第１号土坑出土遺物観察表（第15図）

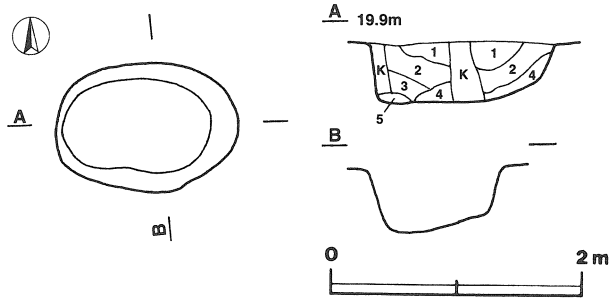
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	釉薬	産地	年代	出土位置	備考
1	陶器	徳利	－	(2.7)	[8.2]	にぶい黄橙	オリーブ	灰釉	瀬戸・美濃系	18C後半～19C	覆土中	5％

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q1	砥石	(5.5)	4.1	1.3	(31.0)	凝灰岩	表面に使用痕　３面使用	覆土中	

第２号土坑（第16図）

位置　調査Ⅰ区の北部，Ａ１f8区。

規模と形状　長径1.44m，短径1.06mの不整楕円形で，深さは48cmである。壁は外傾して立ち上がる。長径方向は，N－86°－Wである。底面は平坦である。



第16図　第２号土坑実測図

覆土　５層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　　ローム粒子中量
2　暗　褐　色　　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　黒　褐　色　　ローム粒子微量
4　褐　　色　　ローム粒子中量，赤色粒子少量
5　褐　　色　　ローム粒子多量

遺物出土状況　遺物は，出土していない。

所見　時期は，出土遺物がなく不明である。

第３号土坑（第17図）

位置　調査Ｉ区の中央部，Ａ１h0区。

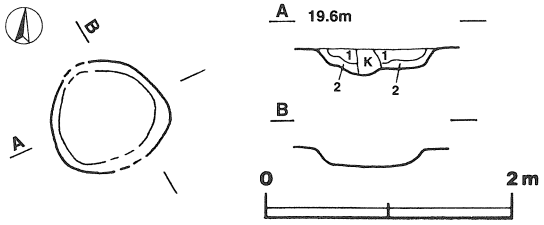
規模と形状　長径0.97m，短径0.88mの不整楕円形で，深さは15cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。長径方向は，Ｎ－89°－Ｗである。底面は平坦である。

覆土　２層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　　ローム粒子微量
2　黒　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

遺物出土状況　遺物は，出土していない。

所見　時期は，出土遺物がなく不明である。



第17図　第３号土坑実測図

第４号土坑（第18図）

位置　調査Ｉ区の北部，Ａ１i0区。

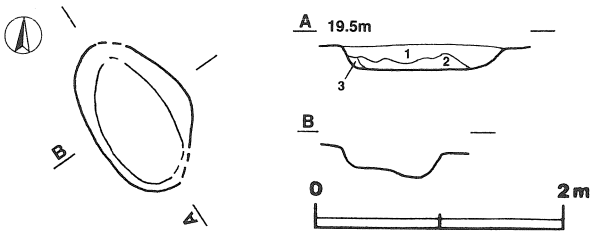
規模と形状　長径1.31m，短径0.82mの不整楕円形，深さは22cmである。壁は，外傾して立ち上がる。長径方向は，Ｎ－25°－Ｗである。底面は平坦である。

覆土　３層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　極暗褐色　　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　　ローム粒子少量
3　褐　　色　　ローム粒子少量

遺物出土状況　遺物は，出土していない。

所見　時期は，出土遺物がなく不明である。



第18図　第４号土坑実測図

第６号土坑（第19図）

位置　調査Ｉ区の中央部，Ａ１h0区。

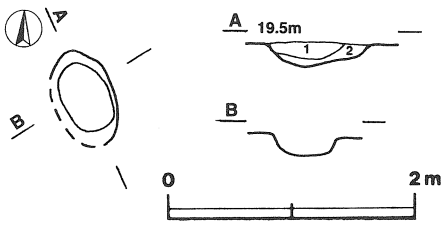
規模と形状　長径0.80m，推定短径0.51mの不整楕円形，深さは17cmである。壁は，外傾して立ち上がる。長径方向は，Ｎ－22°－Ｗである。底面は平坦である。

覆土　２層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　　ローム粒子少量

遺物出土状況　遺物は，出土していない。

所見　時期は，出土遺物がなく不明である。

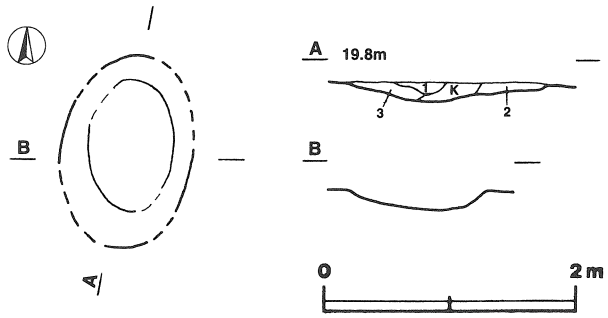


第19図　第４号土坑実測図

第７号土坑（第20図）

位置　調査Ｉ区の北部，Ａ１j9区。

規模と形状　長径1.55m，短径1.04mの不整楕円形，深さは15cmである。壁は，緩やかに外傾して立ち上がる。



第20図　第７号土坑実測図

長径方向は，N－12°－Eである。底面は平坦である。

覆土　３層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子微量
2　極暗褐色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　遺物は，出土していない。

所見　時期は，出土遺物がなく不明である。

第20号土坑（第21図）

位置　調査Ⅰ区の南部の東端，Ｂ２a2区。

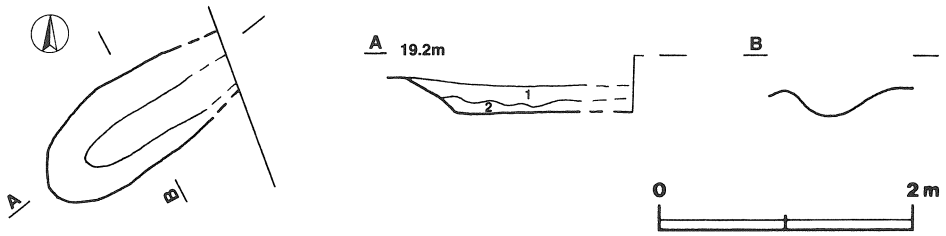
規模と形状　推定長径1.71m，短径0.72mの不整楕円形で，深さは20cmである。壁は，緩やかに外傾して立ち上がる。長径方向は，N－54°－Eである。底面は平坦である。

覆土　２層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

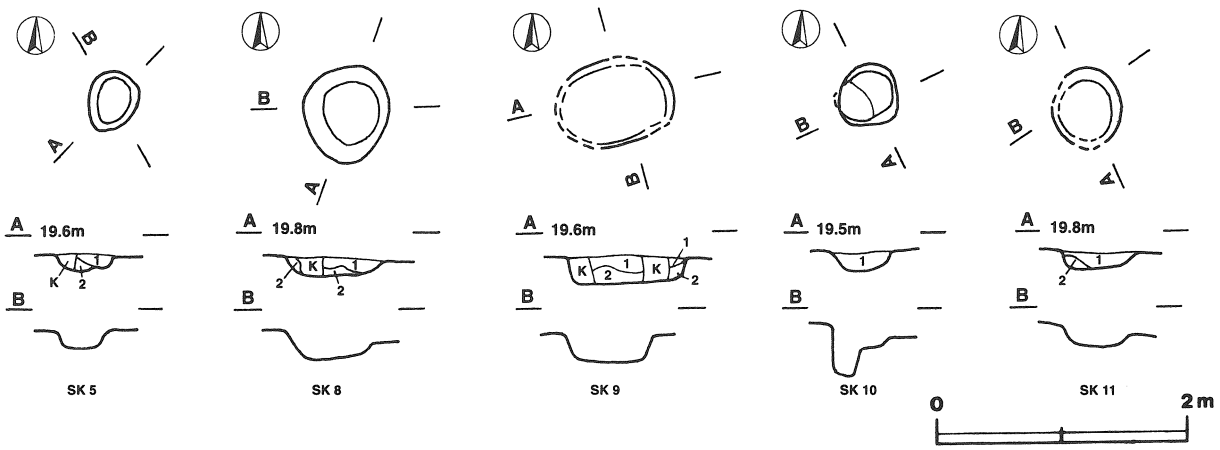
土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量，硬く締まっている
2　暗　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　遺物は，出土していない。

所見　時期は，出土遺物がなく不明である。



第21図　第20号土坑実測図



第22図　土坑実測図(1)

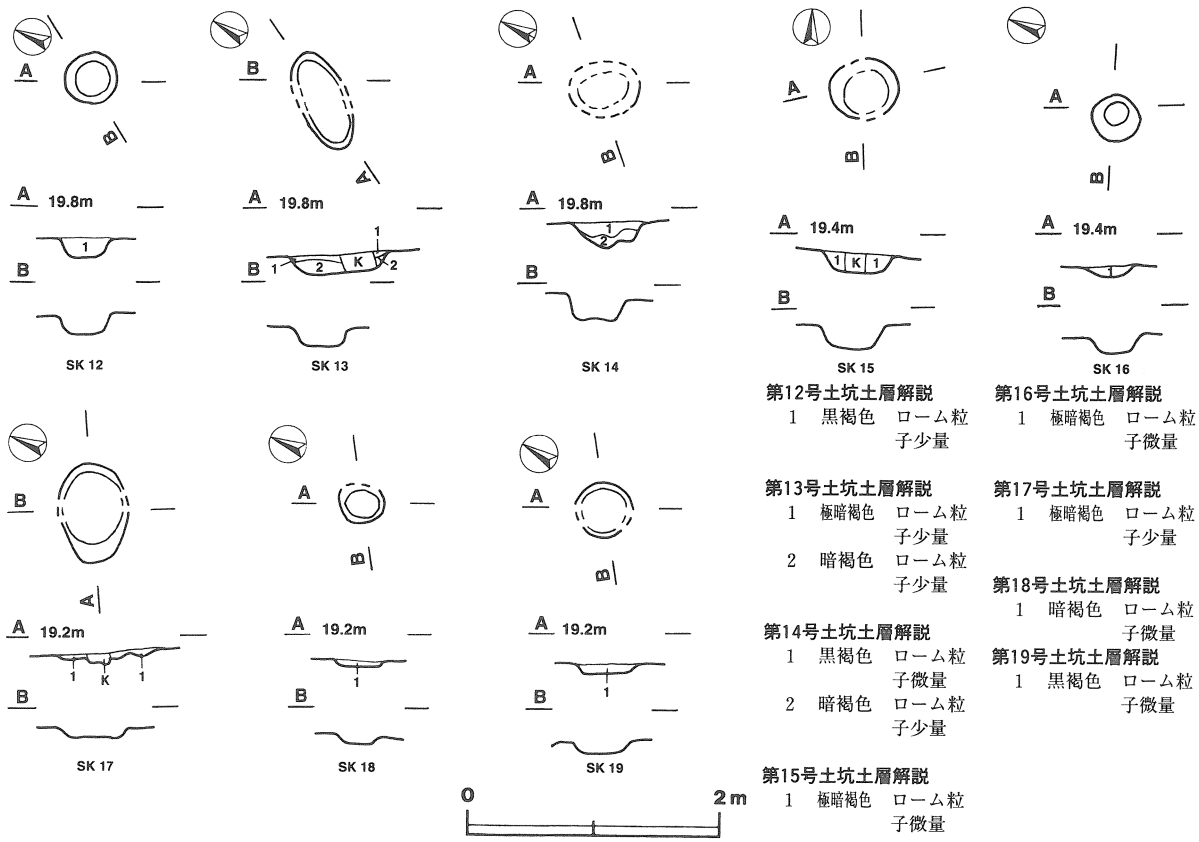
第５号土坑土層解説
1　黒　色　ローム粒子中量
2　暗褐色　ローム粒子少量

第８号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子中量

第９号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子少量

第10号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子微量

第11号土坑土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子少量



第12号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量

第13号土坑土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子少量

第14号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子少量

第15号土坑土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子微量

第16号土坑土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子微量

第17号土坑土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子少量

第18号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子微量

第19号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子微量

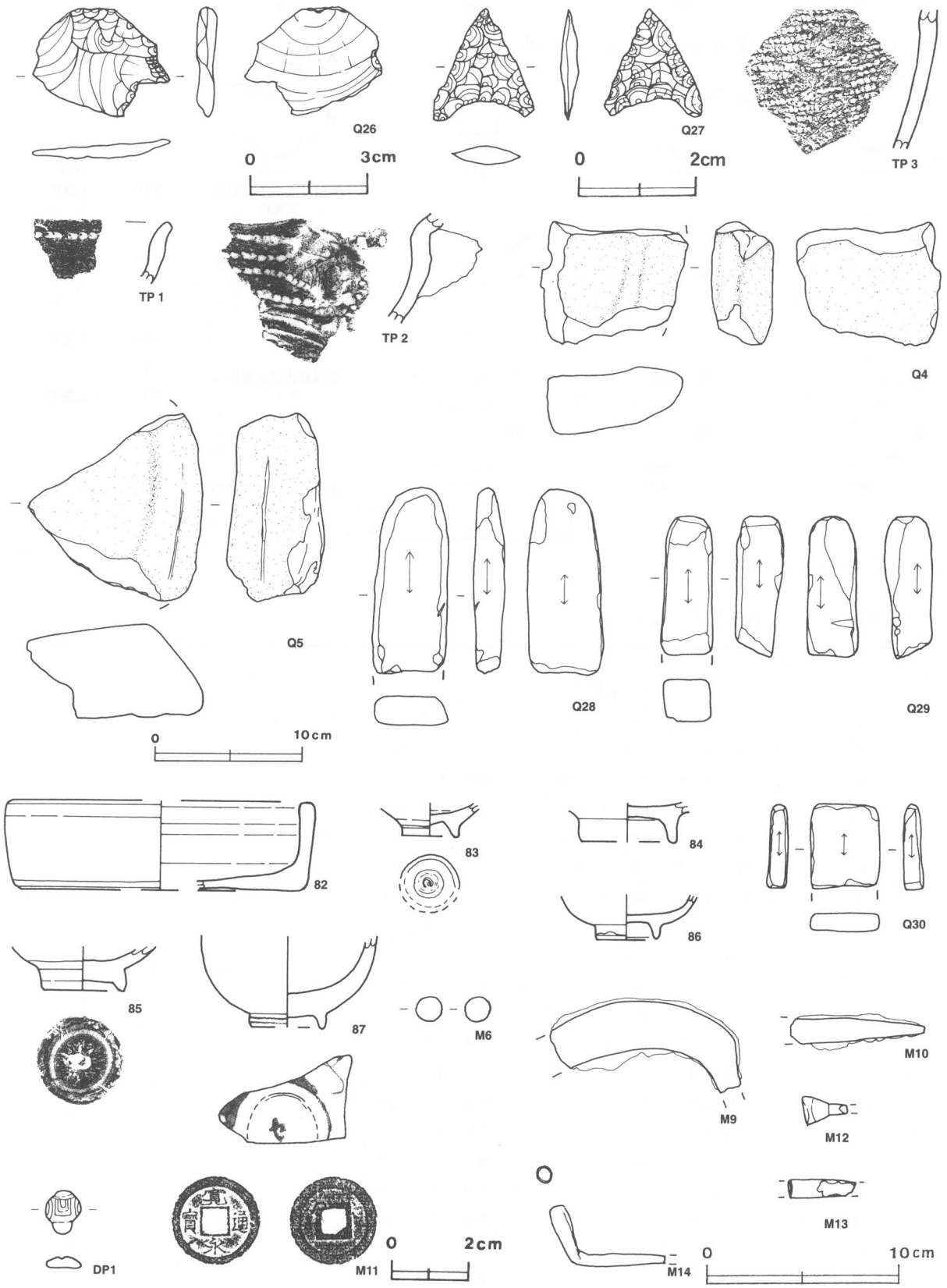
第23図　土坑実測図(2)

表２　樋の沢久保遺跡土坑一覧表

番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
1	A1e7	N－22°－W	［長方形］	2.10 × [0.67]	40	外傾	平坦	自然	土師器片５点，陶磁器片10点，石１点	
2	A1f8	N－86°－W	楕円形	1.44 × 1.06	48	外傾	平坦	自然		
3	A1h0	N－89°－W	楕円形	0.97 × 0.88	15	緩斜	平坦	自然		
4	A1io	N－25°－W	楕円形	1.31 × 0.82	22	外傾	平坦	自然		
5	A1i0	N－24°－E	楕円形	0.49 × 0.40	16	外傾	平坦	自然		
6	A1h0	N－22°－W	楕円形	0.80 × [0.51]	17	外傾	平坦	自然		
7	A1j9	N－12°－E	楕円形	1.55 × 1.04	15	緩斜	平坦	自然		
8	A1j0		円形	0.71 × 0.69	20	緩斜	平坦	自然	陶器片２点	
9	B2a1	N－73°－E	［楕円形］	[0.94] × 0.68	24	外傾	平坦	自然		
10	A1g0		円形	0.51 × 0.47	40	直立	平坦	自然		
11	B1a0	N－１°－E	［楕円形］	0.64 × 0.54	15	緩斜	平坦	自然	土師器片１点	
12	B1a0		円形	0.41	15	外傾	平坦	自然		
13	B2b1		［楕円形］	0.83 × [0.40]	15	外傾	平坦	自然		
14	B1c0	N－35°－W	［楕円形］	[0.57] × [0.45]	18	外傾	平坦	自然		
15	B2f3	N－70°－E	［楕円形］	0.55 × [0.49]	15	外傾	平坦	自然		
16	B2f3		円形	0.41 × 0.36	14	外傾	平坦	自然		
17	B2f4	N－71°－E	［楕円形］	0.78 × [0.55]	9	緩斜	凹凸	自然		
18	B2e4	N－16°－W	［楕円形］	0.38 × [0.31]	9	緩斜	平坦	自然		
19	B2f4	N－28°－W	楕円形	0.46 × 0.41	8	緩斜	平坦	自然		
20	B2a2	N－54°－E	［楕円形］	[1.71] × 0.72	20	緩斜	平坦	自然		

3　遺構外出土遺物

今回の調査では，遺構に伴わない縄文時代から近世にかけての遺物が何点か出土している。ここでは，これらの出土遺物を一括して実測図（第24図）と観察表で記載する。



第24図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	計測値	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	(3.0)	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	隆帯に沿って結節沈線文を施している。	表土中	PL 6
TP2	縄文土器	深鉢	(5.4)	長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部と頸部の境に隆帯を施している。隆帯に沿って結節沈線文。	表土中	PL 6
TP3	縄文土器	深鉢	(7.3)	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	RLの単節縄文を横方向に施している。	表土中	PL 6

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉薬	産地	年代	出土位置	備考
82	陶器	盤	[16.0]	4.6	[14.2]	灰白	浅黄		灰釉	瀬戸・美濃系	18C～19C	表土中	
83	陶器	碗	－	(2.2)	3.0	灰白	灰白		灰釉	瀬戸・美濃系		表土中	
84	陶器	碗	－	(2.1)	[4.8]	灰白	浅黄		灰釉	肥前系		表土中	
85	陶器	碗	－	(2.3)	4.2	灰白	オリーブ灰		灰釉	肥前系		表土中	
86	クロム青磁	碗	－	(2.3)	3.0	緑	緑			不明	明治以降	表土中	
87	磁器	碗	－	(4.2)	[3.8]	灰白	灰白	梅樹文	透明	肥前系		表土中	PL 4

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4	石皿	(6.3)	(7.6)	3.4	(144.9)	安山岩		表土中	PL 6
Q5	台石	(12.9)	(12.0)	6.4	(1031.8)	安山岩		表土中	
Q26	剥片	2.8	3.6	0.6	3.6	硬質頁岩	縦長剥片の上半部。打面部は調整されており，山形を呈する。	表土中	PL 6
Q27	石鏃	1.9	1.7	0.3	0.8	チャート	凹部無茎鏃	表土中	PL 6
Q28	砥石	(9.5)	4.9	1.1	(90.8)	凝灰岩	3面使用	表土中	
Q29	砥石	(7.2)	2.7	2.5	(75.8)	凝灰岩	4面使用	表土中	
Q30	砥石	(4.3)	3.6	1.1	(24.0)	凝灰岩	3面使用	表土中	

番号	器種	計測値				特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
DP 1	泥面子	2.2	1.8	0.6	2.0	木槌を模したものか	表土中	PL 6

番号	器種	径(cm)	重量(g)	材質	特徴	出土位置	備考
M 6	鉛玉	1.3	12.7	鉛	表面は灰オリーブ色に変色	表土中	PL 6

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
M 9	鎌	(9.8)	2.4	0.4	(90.0)	鉄	曲刃鎌	表土中	PL 6
M10	刀子	(6.9)	1.4	0.4	(11.5)	鉄	刃部先端欠損	表土中	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
M12	煙管	(2.3)	1.5	0.1	(2.7)	銅	吸い口部	表土中	PL 6
M13	煙管	(3.5)	0.9	0.1	(1.7)	銅	吸い口部で一部欠損	表土中	
M14	煙管	(5.9)	0.9	0.1	(5.1)	銅	吸い口部	表土中	

番号	銭銘	径(cm)	口径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	初鋳年代（西暦）	出土位置	備考
M11	寛永通寶	2.3	0.6	0.1	2.4	江戸（1714年）	表土中	PL 6

第4節　ま　と　め

今回の調査で，樋の沢久保遺跡から検出された遺構は，井戸跡２基，土坑20基，溝１条である。当遺跡の中心となる時期は，近世の江戸時代中頃と考えられ，前記の遺構のうち溝と井戸跡１基がこの時期にあたると思われる。土坑は，遺物が出土しているものがほとんどなく，時期不明である。今回の調査は，２か所に分かれており，便宜上北部をⅠ区，南部をⅡ区とした。

ここでは，当遺跡から検出された近世の遺構と遺物についてその概要を述べ，まとめとしたい。

1　遺構について

当遺跡からは，井戸跡２基，土坑20基，溝１条が検出された。溝と井戸跡は，いずれも調査Ⅰ区から検出されている。溝はＢ２e1区から北西方向にほぼ直線的に延びるが，南部のＢ１e0区で北東方向に向かってＬ字形に曲がっている。溝は農道を隔てたⅡ区からは，検出されていない。

このうち溝（第１号溝）と第１号井戸跡からは，江戸時代中頃（18～19世紀）と思われる陶磁器や在地の土師質土器が出土した。特に第１号溝からは，覆土の各層から多量に出土しており，長期間にわたり断続的に投棄された可能性が考えられる。

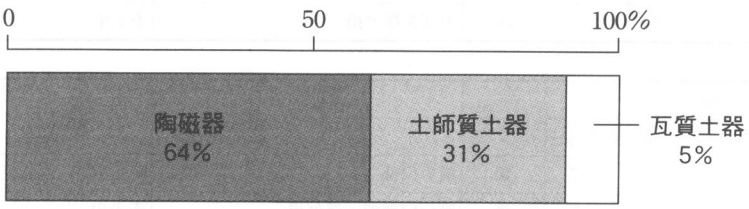
第１号井戸跡は，第１号溝と重複しており，土層の堆積状況から，本跡が埋め戻された後に，第１号溝が構築された可能性が高い。第２号井戸跡は，第１号井戸跡のほぼ真北に位置する。第２号井戸跡からは，遺物は出土していないが，規模や形状は第１号井戸跡と似ている点が多い。

土坑は，20基検出されている。規模や形状はさまざまである。遺物が出土しているのは，第１・８・11号土坑で，陶磁器の破片が少量出土しているが，これ以外は出土していない。

2　遺物について

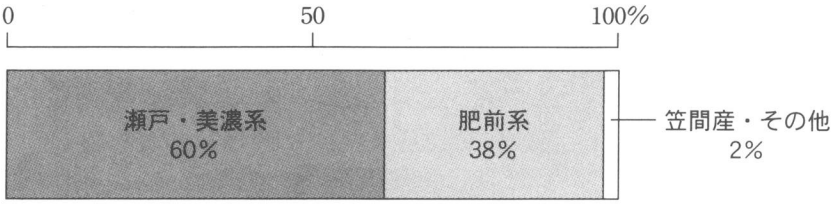
当遺跡から出土した近世の遺物は図示した99点を含め，994点にのぼる。これらの内訳を示したのが第１図である。

在地産土師質土器が309点で31%，在地産瓦質土器が52点で５%，陶磁器が632点で64%である。在地産の土師質土器を器種別にみると，調理具である焙烙が199点で64%を占め，甕，皿，擂鉢と続く。瓦質土器は擂鉢，火鉢，鉢の順番に続く。このように在地産の土器は，調理具・貯蔵具・灯明具が大部分をしめる。在地産の土器は，当遺跡の全期間を通してみられる。



第１図　樋の沢久保遺跡出土遺物組成図

陶磁器類は近世の遺物の５分の３を占めている。これらを産地毎の割合で示したのが，第２図である。瀬戸美濃系陶器が60%，肥前系陶磁器が38%で，この他，笠間産と思われる土瓶が出土しているが，産地不明の陶磁器もあった。



第2図　樋の沢久保遺跡陶磁器産地組成図

次に産地ごとに，器種を概観してみる。瀬戸・美濃系陶器の器種は，天目茶碗，擂鉢，碗の順に多く，この他，灯明皿，徳利，盤，仏花瓶，双耳壺等が出土している[1]。各種用途の製品がみられる。肥前系陶磁器では，碗，皿が大部分で，食膳具が中心となる[2]。

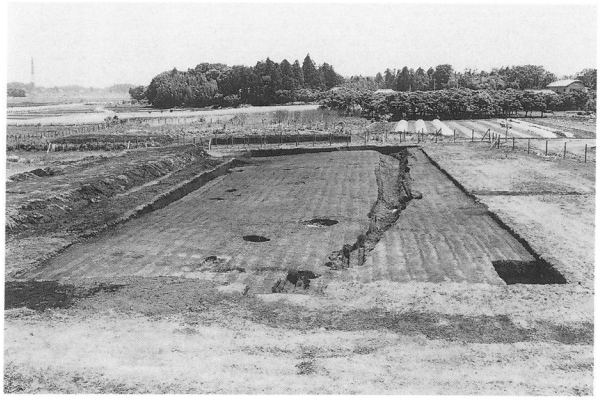
上記の遺構や遺物から，江戸時代中頃（18～19世紀），当遺跡周辺に農民の屋敷の存在が想定される。そして溝や井戸，あるいは土坑もこの屋敷に付属する施設であった可能性が高い。

参考文献

1）瀬戸市教育委員会　『瀬戸市史　陶磁史編六』　1988年3月

2）九州近世陶磁学会　『九州陶磁の編年　－九州近世陶磁学会10周年記念－』　2001年2月

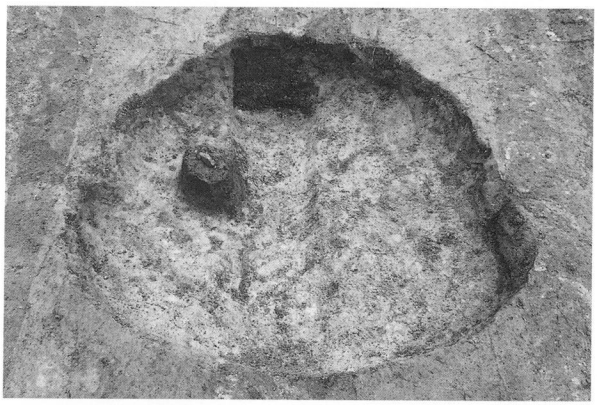
写　真　図　版



Ⅰ区完掘状況

第1号土坑完掘状況

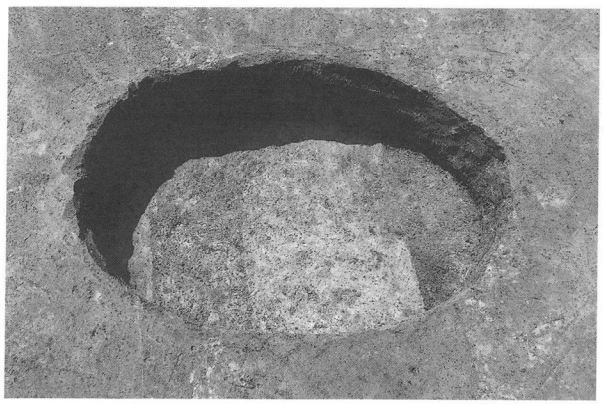
第2号土坑完掘状況



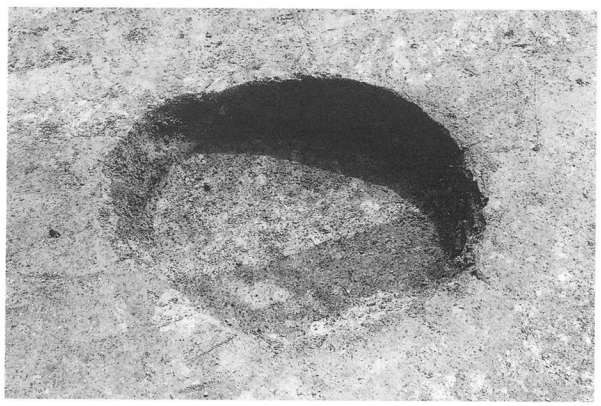
第3号土坑完掘状況

第4号土坑完掘状況

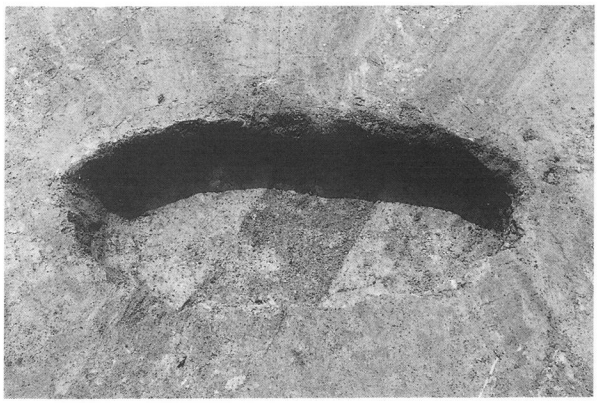
第6号土坑完掘状況



第9号土坑完掘状況

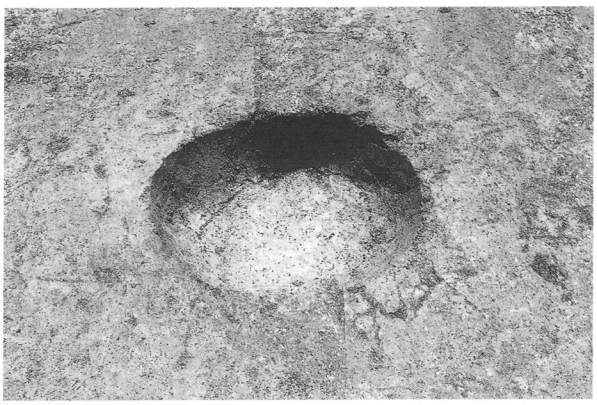


第11号土坑完掘状況

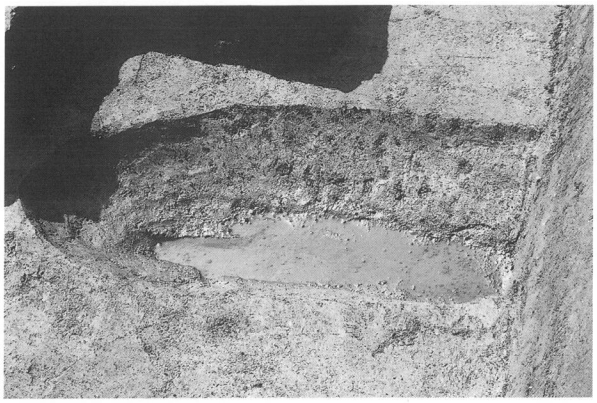


第13号土坑完掘状況

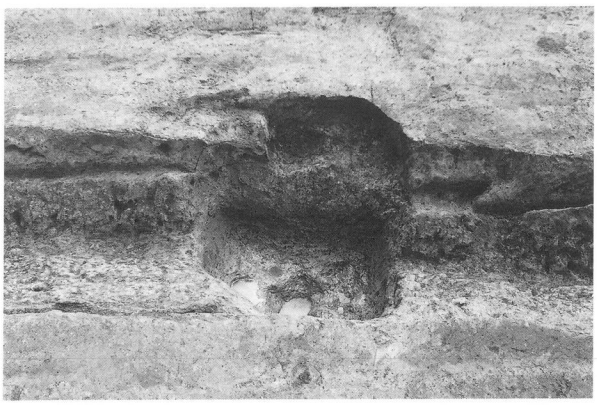
第14号土坑完掘状況



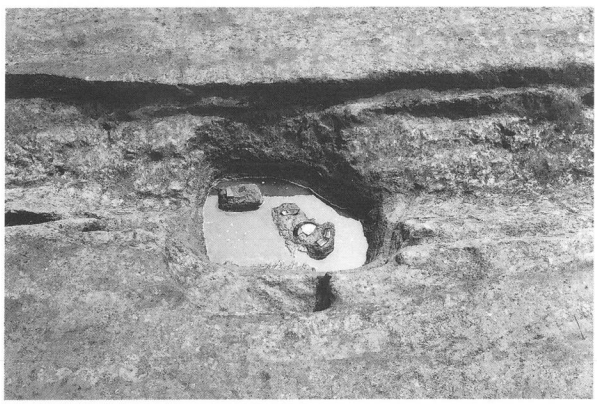
第15号土坑完掘状況



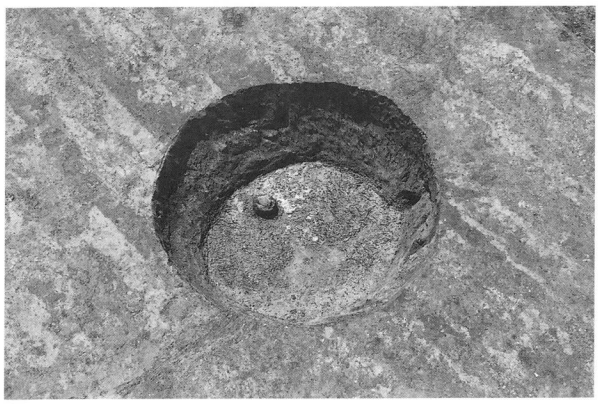
第20号土坑完掘状況



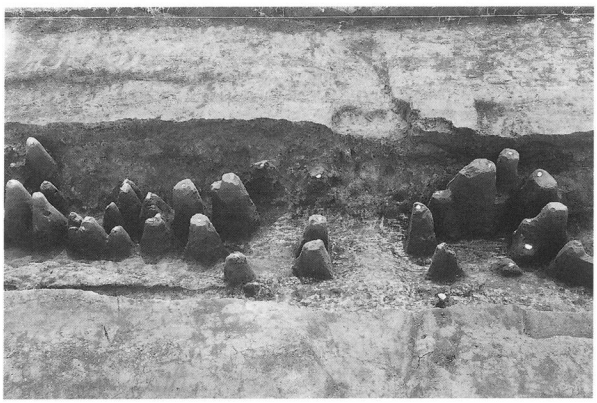
第1号井戸跡完掘状況



第1号井戸跡遺物出土状況



第2号井戸跡遺物出土状況



第1号溝遺物出土状況

SD 1-13

SD 1-14

SD 1-15

SD 1-18

SD 1-35

SD 1-36

SD 1-42

SD 1-43

SD 1-46

SD 1-44

SD 1-49

SD 1-34

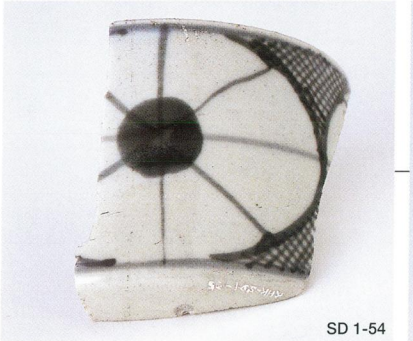
SD 1-26

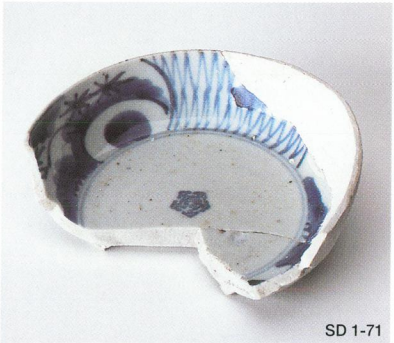
SD 1-27

第1号溝出土遺物

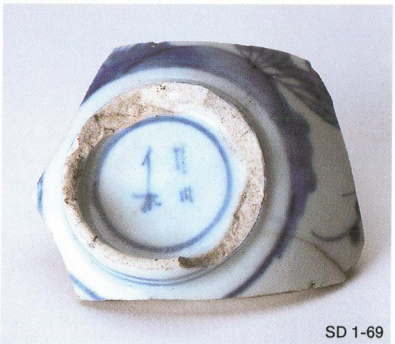
SD 1-56

SD 1-62


SD 1-54


SD 1-71

SD 1-59

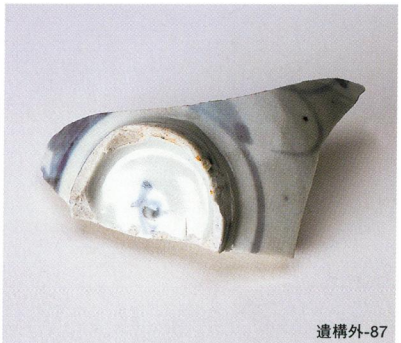

SD 1-69

SD 1-53

SD 1-60

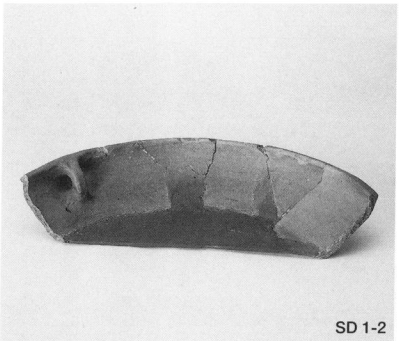
SD 1-73

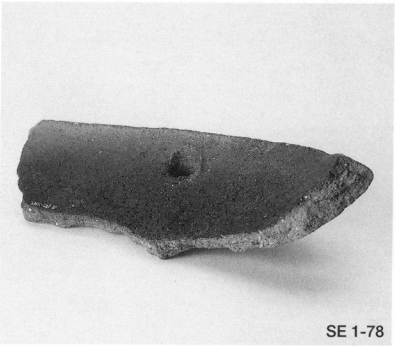
SD 1-72

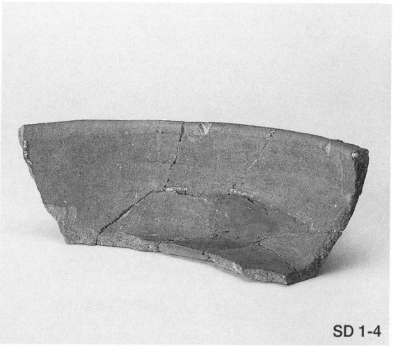

遺構外-87

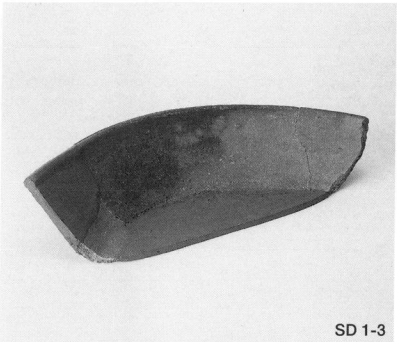
SD 1-58

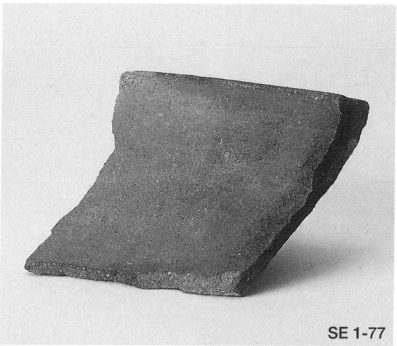
第1号溝，遺構外出土遺物


SD 1-2


SE 1-78

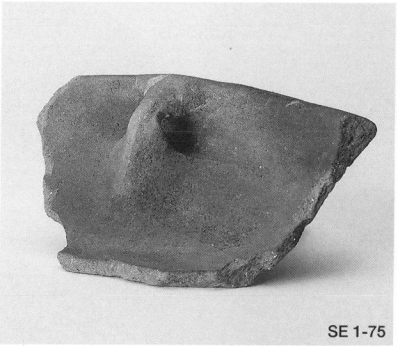

SD 1-4

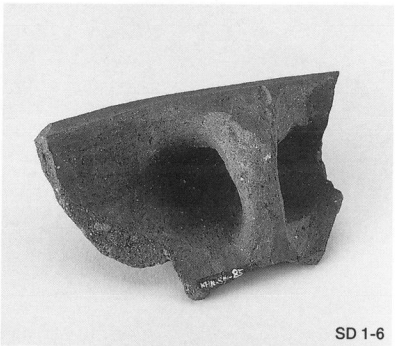

SD 1-3


SE 1-77

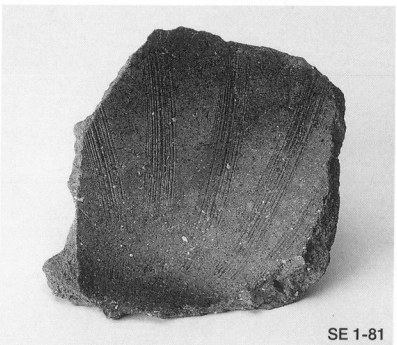
SE 1-76

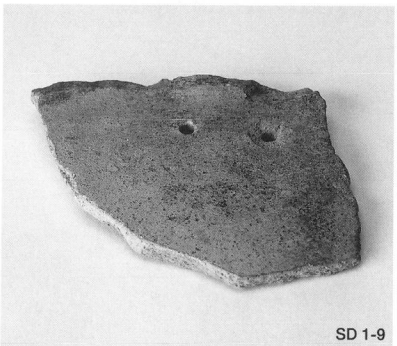
SD 1-7


SE 1-75


SD 1-6

SE 1-74

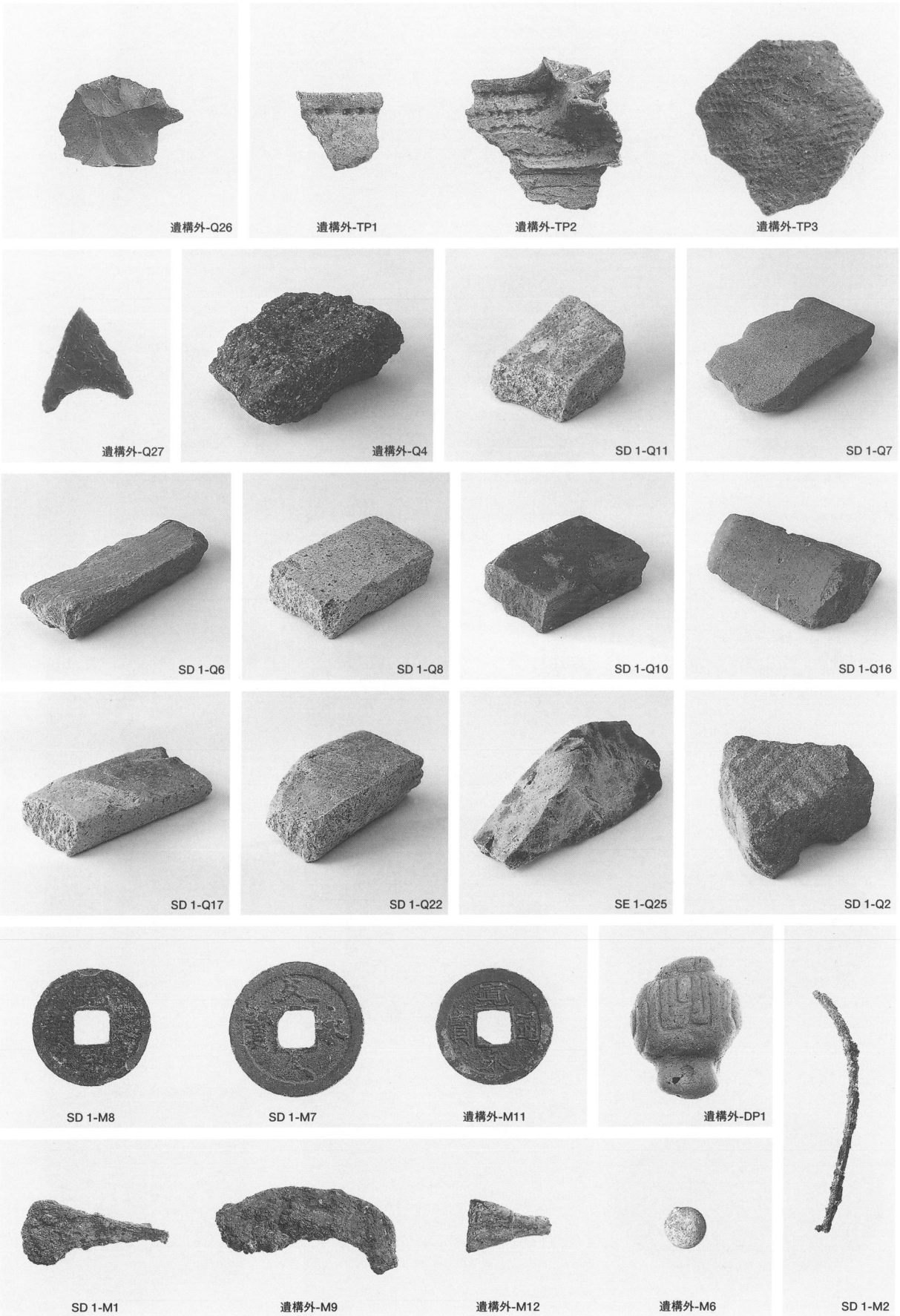

SE 1-81


SD 1-9

SE 1-79

SE 1-80

第1号井戸跡，第1号溝出土遺物



第1号井戸跡，第1号溝，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第186集

樋の沢久保遺跡

平成14年（2002）年３月20日　印刷
平成14年（2002）年３月25日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
ＴＥＬ　029－225－6587

印刷　ワタヒキ印刷株式会社
〒310－0012水戸市城東1－5－21
ＴＥＬ　029－221－4381